# 新石器時代韓日交流の動態

金　　恩　瑩

（訳：水ノ江和同）

附　金恩瑩「新石器時代韓日交流の動態」を翻訳して（訳者後記）　水ノ江和同

附　金恩瑩「新石器時代韓日交流の動態」を読んで　中尾　篤志

2025年 9 月

『西海考古』第15号　抜刷

2024.12『海洋遺産』6　国立海洋博物館

# 新石器時代韓日交流の動態

金　　恩瑩
（訳：水ノ江和同）

## はじめに

韓半島南部地域と日本西北九州地域には、大韓海峡《対馬海峡西水道：訳者》を渡ったと考えられる新石器時代の遺物が多数出土している。遺物の移動の背景には人々の移動があり、両地域の人々の出会いと関係が形成されていた。黒曜石やサヌカイトといった石材や搬入土器など、人々の渡航を直接的に示してくれる遺物以外にも、類似した土器と漁撈具など、人々の出会いを間接的に示してくれる遺物もある。これらの遺物の移動の量と方向、そして類似度などを通して、当時の両地域の人々がどのような関係を形成していたかどうかを究明することは、新石器時代の韓日交流研究の課題の一つである。

韓半島南部地域と日本西北九州地域の間の交流は、新石器時代研究においてとても深い歴史があり、難しく敏感なテーマでもある。2000年代はじめまで、韓日交流研究《韓日は韓半島と日本列島を指す：訳者追記》は大韓海峡を共同の漁場として、漁撈民の往来により文物が移動して相互に影響を与えたということを前提に、両地域間の遺物の類似性の検索に焦点を合わせてきた。韓半島南部地域での「隆起文土器→瀛仙洞式土器→水佳里Ⅰ式（太線沈線文）土器」としての変遷と、九州地域での「轟Ｂ式土器→西唐津式土器→曽畑式土器」としての変遷が、基本的に「隆起文→刺突・押引文→沈線文」という同一の変化をみせ、一定の関連性があるというものであった（水ノ江 1988）。そして、両地域の間の交流関係研究の中心には、結合式釣針と石鋸といった共通した漁撈具があった。

その後、両地域から出土した搬入土器や異系統土器を根拠に、年代的併行関係の確立とともに自国内での土器と漁撈具などに対する研究が深化したことで、韓日交流の研究の傾向も変わってきた。特に、2000年代はじめから日本側の研究では、韓日交流の実態に対する再検討が活発におこなわれている。曽畑式土器の内在的出現の可能性を根拠に、韓半島からの直接的な影響が否定され、瀛仙洞式土器と西唐津式土器の時期以外の韓日の新石器時代の土器は、器種組成・文様・器面調整などにおいて、基本的には共通性は認められないという見解（水ノ江和同 2007、古澤義久 2013）が提示された。結合式釣針も韓日間での相違点に注目し、大韓海峡に分布の境界が存在するとし（木村幾多郎 2003）、また、九州地域の結合式釣針と鋸歯状尖頭器・石鋸は九州で成立したため漁撈具を通じた韓日間の共同の漁撈文化（圏）を想定することは難しいという主張も現れた（中尾篤志 2013、久我谷渓太 2016）。

このような最近の研究動向を考慮しながら、本稿では筆者が最近分析した韓半島地域の黒曜石と漁撈具の出土様相と変遷に基づき、韓日交流の実態がどのように変化したか、韓日交流の基本型として規定されてきた共同の漁撈文化圏の存在は否定されても良いのかどうか、について検討をおこなう。参考に本稿では、表１の土器編年（註１）に基づき説明を進める次第である。

## １　韓半島南部地域での九州産黒曜石出土様相

韓半島南部地域から出土する黒曜石は、韓日交流の標識として扱われてきた。特に、黒曜石の産地

**表１　韓半島～日本九州地域広域編年表**

| 絶対年代 cal. BC | 韓半島（新石器時代） | | | | 日本（縄文時代） | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 時期区分 | 中西部地域 | 中東部地域 | 南部地域 | 時期区分 | |
| 13,700 | 初期 | | | 高山里式土器（有機物混入痕土器） | 草創期 | 豆粒文土器<br>隆起線文土器<br>柏原式土器（繞円孔文） |
| 10,000 | | | | | 早期 | 小ヶ倉式土器（貝殻文円筒形）<br>百花台式土器（押型文）<br>塞ノ神式土器（沈線文＋撚糸文）<br>苦浜式土器（添付突帯文） |
| 7,000 | | | | | | |
| 6,000 | 前期 | 区分系土器 | 竹邊里式土器（赤塗磨研・押圧文）<br>鷲山里式土器（押圧文・隆起文） | 竹邊里式土器（赤塗磨研・押圧文）<br>隆起文土器<br>瀛仙洞式土器（刺突押引文） | 前期 | 轟B式土器（条痕文・隆起線文）<br>西唐津式土器（隆起線文・沈線文）<br>曽畑式土器（沈線文） |
| 5,000 | | | | | | |
| 4,000 | 中期 | 区分系・同一系土器 | 区分系・同一系土器 | サルネ式土器（区分系・同一系土器）<br>水佳里Ⅰ式土器（太線沈線文） | 中期 | 船本式土器<br>並木式土器<br>阿高式土器 |
| 3,000 | 後期 | 同一系土器 | 同一系土器 | 鳳渓里・水佳里Ⅱ式土器（点列・（退化）沈線文）<br>栗里式土器（二重口縁） | 後期 | 坂の下式土器・南福寺式土器<br>出水式土器<br>三万田式土器 |
| 2,000 | | | | | | |

である九州地域から韓半島南部地域への移動の方向性を明確にすることができる遺物である、という点において有用な資料である。

韓半島南部地域の黒曜石は、蔚山の處容里（註２）１ヶ所を除けば、すべて日本の九州産として分析されている。九州地域の黒曜石産地としては、腰岳・淀姫・針尾島が知られており、各産地別の同定が可能な程度に産地分析研究が進展してきた。しかし、韓半島南部地域では、ある遺跡では特定の産地の黒曜石が搬入されたとか、時期によって利用される産地が変わるなどといった変化は、はっきりとはみられない。

黒曜石は九州地域から韓半島南部地域への文物の移動という方向性を明確に示しているが、それだけでは搬入時期を知ることはできない。したがって、共伴する土器をもって黒曜石の搬入時期を判断しなければならず、時期が異なる土器が混在する遺跡・遺構・文化層から出土した黒曜石は、どの土器と共伴するかという根拠を探ることは難しい。そこで筆者は、単純な時期の遺跡や遺構、文化層から出土して帰属時期が確実な資料を利用して、韓半島南部地域での九州産黒曜石の出土様相を検討してみた（金恩瑩・張龍俊 2022）。時期が異なる土器が混在するために分析対象から除外する資料も多いが、時期が明確な共伴関係は、その後もその関係性が壊れることなく繰り返し確認されている。このような研究成果が蓄積されれば、石器や骨角器の形態や組成だけでも帰属時期が明確になり、新石器時代の社会相研究を進めることができる、もっとも基礎的な基盤となるのである。幸い、韓半島南部地域では、単純時期の遺跡・遺構・文化層が相当数調査されたため、前稿（金恩瑩・張龍俊 2022）の分析結果が黒曜石搬入のおおよその様相を、反映していると判断される。

韓半島南部地域で時期的に確実に黒曜石が搬入されたのは、前期の隆起文土器段階と後期の栗里式

**表２　韓半島南部地域隆起文土器段階黒曜石出土現況（対馬包含）**

| No | 遺跡名<br>（出土位置） | 器種 | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 石鏃 | 石槍 | 石刃 | スクレーパ | ドリル | 鋸歯状尖頭器 | 石鋸（註４） | 石錐 | 細石器 | 剥片石器 | 原石 | 剥片 |
| 1 | 蔚山 細竹 | 3 | | | | | | | | | | | |
| 2 | 蔚山 處容里 Ⅱ区域<br>１号竪穴遺構 | 1 | | | | | | | | | | | |
| 3 | 蔚山 牛峰里 | | | | | | | | | | | | 1 |
| 4 | 蔚州 新岩里 | 2 | | | | | 6 | | 7 | | | | |
| 5 | 釜山 東三洞 淨化地域<br>７～９層 | 2 | | | | | | | 3 | | | | |
| 6 | 釜山 凡方貝塚 13層 | 1 | | | | | | | | | | | |
| 7 | 釜山 加德島 獐項<br>（９·33号人骨，Ⅸ層） | 2 | | | | | | | | | 2 | | |
| 8 | 統營 煙臺島 墳墓 | 4 | | | | | | | | | | | |
| 9 | 麗水 突山松島 Ⅲ，Ⅳ層 | | | | | | | | | | 2 | | 4 |
| 10 | 麗水 安島 Ⅰ・Ⅱ層 | | | | | | | | | | 1 | | 2 |
| 11 | 対馬越高 | 9 | | | | | | | | | | 8 | ○ |

土器段階である。そのなかでも隆起文土器段階では、新石器時代を通じて圧倒的に多くの黒曜石が搬入された。確実に黒曜石が共伴する隆起文土器段階の遺跡としては、蔚山の細竹遺跡・牛峰里遺跡・處容里遺跡、蔚州の新岩里遺跡・東三洞貝塚浄化地域７～９層、凡方貝塚13層、加得島獐項遺跡９・13号人骨、統営の煙臺島貝塚の墓、突島の松島遺跡Ⅲ・Ⅳ層、対馬島の越高遺跡などがある（表２）。この段階の黒曜石は石鏃を中心に、組合式銛頭の鋸歯状尖頭器の鋸刃を大きく作った形態（註３）、石銛（石製単式銛頭）など、狩猟・漁撈具がおもに製作されていた（図１－26～37）。原石と剥片も含まれており、隆起文土器遺跡の範囲が対馬島の越高遺跡まで拡大したことは、この黒曜石を確保するためではないかと考えられる（古澤 2013）。隆起文土器段階のおもな生業である狩猟と漁撈に使用した道具が黒曜石で製作されたことは、それだけ黒曜石を必要としたことを示してくれる事実であり、新石器時代を通じてこの段階に黒曜石がもっと多く搬入された理由としては十分である。この段階には黒曜石のほかにも、轟Ｂ式土器，サヌカイトに似た石材，石匙など、日本の九州地域と関連した遺物が韓半島南部地域に搬入されており、西北九州地域まで隆起文土器と隆起文土器に共伴する沈線＋赤塗磨研土器が出土するなど、両地域間に土器と石材・石器の移動が活発におこなわれていたことがわかる。

隆起文土器段階以外に黒曜石の搬入が明確に確認できる時期は、後期後半に該当する栗里式土器段階である。栗里式土器段階では、晋州の貴谷洞大村遺跡、統営の牛島ウルマッケ遺跡、金海の水佳里貝塚Ⅱ層から黒曜石の剥片が出土した。現在まで、栗里式土器に確実に伴いながら器種が確実にわかっている黒曜石製の石器はないが、後述する組合式銛頭（鋸歯状尖頭器＋石鋸）なかで、鋸刃を丸くして細かい剥離を加えた型式（図１－41）が、この段階に製作された可能性がある。この型式の組合式銛頭は、韓半島南部地域から出土する黒曜石製石器のなかでも特徴的な器種であるが、現在まで隆起文土器に共伴した事例はない。後述するが、韓半島南部地域の出土様相としては水佳里Ⅰ式土器以降と推定され、九州地域でのこの器種の出現が縄文時代後期から本格化することから（久我谷 2016）、栗里式土器段階に搬入された可能性が高い。このような状況を認めるなら、栗里式土器段階の黒曜石の搬入は、組合式銛頭という特殊な器種に対する要求または受容を通じて生じたこととなる。

隆起文土器段階と比べれば、黒曜石で製作される石器の器種が変わる点と、黒曜石搬入遺跡数とその量が顕著に少ないが、晋州の貴谷洞大村遺跡のように内陸にまで拡散したことが注目される。栗里式土器段階も黒曜石のほかに南福寺式土器、北久根山式土器が韓半島南部地域で確認され、骨角・貝製の結合式釣針が両地域で共有され、二重口縁土器と把手などが対馬島の吉田、ヌカシ遺跡と佐賀県唐津市地域から出土しており、韓日間の活発な交流が生じたことがわかる。特に、唐津市の徳蔵谷遺跡からは組合式銛頭（鋸歯状尖頭器・石鋸）が多量に出土した事実は（福永将大 2024)、栗里式土器段階に韓日間で類似した形態の黒曜石製組合式銛頭が共有された様相を十分に納得させる。

ところが、韓半島南部地域での九州産黒曜石の出土様相は、韓日交流の実態を全体的かつ完璧に反映しているとはいえない。前稿（金恩瑩・張龍俊 2022）でも述べたように、韓日交流に関する既存の研究成果と黒曜石の動きがよく符合する部分があれば、異なる部分もある。隆起文土器と栗里式土器段階は、韓半島南部地域と九州地域の両岸で交流関係遺物が多数確認される時期であり、黒曜石が多量に搬入される様相と整合的であるといえる。

反対に、韓半島南部地域での黒曜石出土様相を通じ、黒曜石が旺盛に搬入されない時期の韓日交流の動態にも注目する必要がある。

瀛仙洞式土器段階は、西北九州では西唐津式土器段階に該当し、既存研究ではもっとも交流が活発だった時期と理解されていたが、韓半島南部地域での黒曜石搬入はあまり活発ではなかった（註５）。古澤は、西唐津式土器段階は土器様式（器種の組合せ）の一部に瀛仙洞式土器の影響が認められる時期である点から、お互い土器様式に影響を及ぼさなかった新石器時代の韓日交流を通じてこれを例外的な時期と主張する（古澤 2013・2018)。南部地域での黒曜石出土様相は、このように既存研究とは相反するようにみえるが、これは交流が存在するかどうか、または強さの問題ではなく、影響の方向

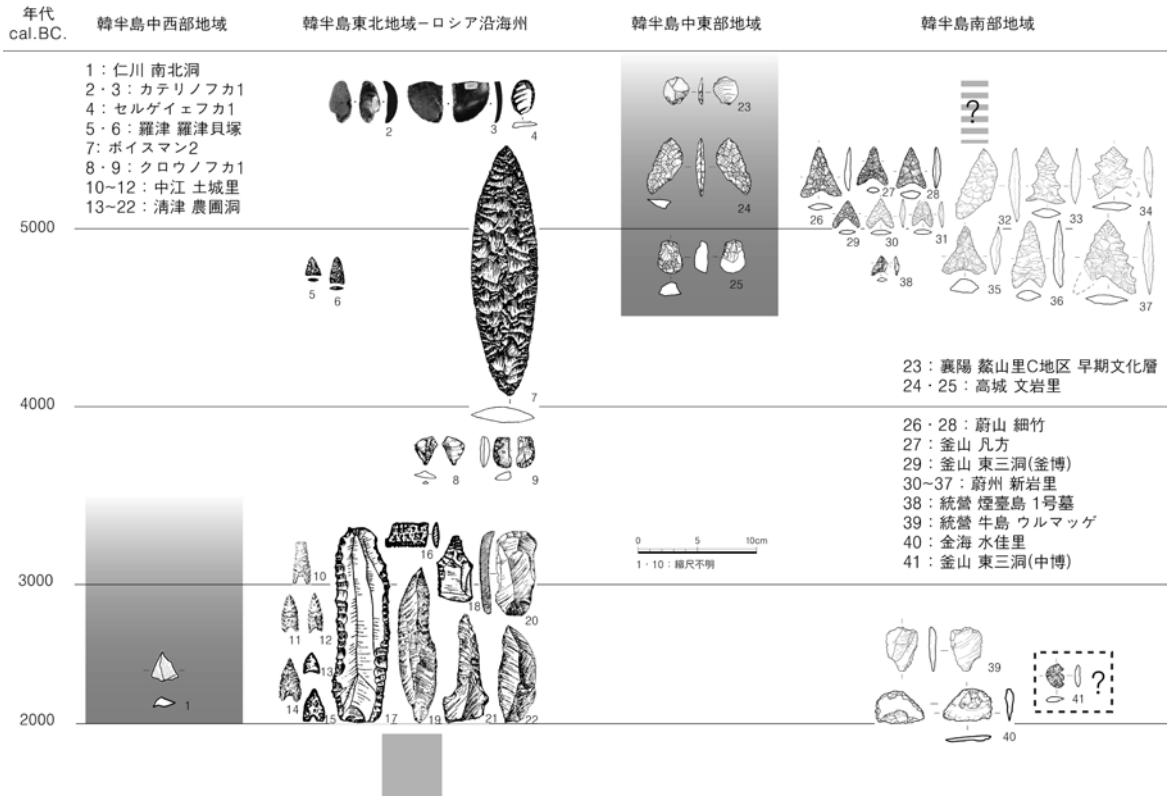



**図１　新石器時代韓半島黒曜石出土状況（金恩瑩・張龍俊2022から修正掲載）**

性の問題として理解されなければならない。すなわち、瀛仙洞式土器段階は、土器の器形と文様帯、前後運動による磨棒・磨盤と漁網錘など中西部地域からの影響が現れる反面、黒曜石や縄文土器の搬入はまったく目に付かないという点から、韓日交流の方向性が九州地域から韓半島南部地域ではなく、韓半島南部地域から九州地域に変わった過渡期と考えられる。

瀛仙洞式土器に続く密陽のサルレ遺跡の口縁限定押圧短斜線文土器に代表される中期サルレ式土器の時期は、土器の内面と底部の調整技法など、製作技法において中西部地域からの直接的な影響を垣間見る点で（金恩瑩 2010）、九州地域との交流よりは中西部地域との関係がより強化された時期として理解される。生業体系が一変して、前期に黒曜石で製作された狩猟・漁撈具が消えるため、黒曜石が搬入されないことは当然の現象かもしれない。

中期後半、水佳里Ⅰ式土器段階には、韓半島南部地域で縄文系遺物がまた増加する。曽畑式土器と船元式土器が蔚山の隍城洞遺跡・新岩里遺跡、釜山の東三洞貝塚と統営の欲知島遺跡などから出土しており、日本の縄文時代の装身具である耳栓の影響と推定される土製の装身具が、釜山～慶州地域にかけて確認される。対馬島と壱岐島では、口縁部短斜線文土器と太線沈線文土器が多数発見された（古澤 2013）。瀛仙洞式土器段階とは異なる交流の流れが双方向に変化した、ということがわかる。ただし、黒曜石の搬入に対し前稿（金恩瑩・張龍俊 2022）では、韓日交流の関係の変化により、黒曜石も一緒に搬入された可能性があると推定されたが、水佳里Ⅰ式土器段階の狩猟具が大部分磨製に変わり、漁網錘を中心に漁撈システムが再編されたという点から、依然として黒曜石に対する需要が生じなかったと考えることが、より妥当といえよう。後期前半である鳳溪里式土器と水佳里Ⅱ式土器段階も明確な黒曜石の事例がなく、水佳里Ⅰ式土器段階と同様な理由であったといえる。

このような流れのなかで、後期後半の栗里式土器段階にまた黒曜石が搬入されるという点がもたらす意味とその背景を把握することが、重要と考えられる。その意味に対しては、Ⅳ章でまた検討する。

黒曜石は、九州地域から韓半島南部地域への文物の移動という方向性を明確にみせてくれるため、確実な土器との共伴関係を根拠に搬入時期を特定することができれば、文物の移動の裏面にある人々の動きを把握できる有用な資料になる。結果的に、韓半島南部地域の九州産黒曜石の出土様相を通して、いままであまり注目されなかった栗里式土器段階に韓日交流が相当な水準でおこなわれ、その交流の産物が内陸地域まで及んだということができた。搬入または製作された黒曜石が、狩猟・漁撈具から特定の器種の漁撈具に変化したという点も注目する必要がある。

## 2　韓半島南部地域と日本九州地域の漁撈具に関する検討

### （1）問題の所在と分析の方法

長い間、韓日交流を説明する枠組みとなっていた漁撈文化が否定されはじめたのは、日本の研究者によっておこなわれた九州地域の漁撈具の編年と、韓半島漁撈具との併行関係に対する再検討が契機となった。したがって、筆者は韓半島南部地域での漁撈具の変遷と九州地域の漁撈具の併行関係を検討して、韓日共同の漁撈文化圏を巡る韓日交流の実態に近づいてみたい。特に、漁撈文化圏の根拠になった結合式釣針と組合式銛頭（鋸歯状尖頭器＋石鋸）を中心に議論を展開したい。韓日共同の漁撈文化圏に対し認定または否定が、結局のところ、両地域間漁撈具の時期的な併行関係研究からはじまったことで、韓半島南部地域での漁撈具の器種組成、ならびに特定型式の帰属時期と存続時間が、論旨の展開においてもっとも重要なポイントにならざるを得ない点に対して、前もって了解を求めたい。

## 表 3　結合式釣針軸部の出土様相（金恩瑩2023から修正掲載）

| No | 出土地 | | 材質 | 総数 | 平面形態・結合部形態 | | | | | | | | | 共伴土器 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | J 字形 | | | C 字形 | | | I 字形 | | | |
| | | | | | 無結溝 | 溝 | 段 | 無結溝 | 溝 | 段 | 無結溝 | 溝 | 段 | |
| 1 | 高城 文岩里 | 1998~2002年調査, Ⅸ ~ Ⅶ－１層 | 石 | 65 | 42 | 1 | | | | | | | | 鰲山里式 |
| 2 | | 2010~2012年調査, ２号炉跡・Ⅻ層 | 石 | 3 | 2 | | | | | | | | | 鰲山里式 |
| 3 | | 2020年調査, 土器群 | 石 | 8 | 4 | | 1 | | | | | | | 鰲山里式 |
| 4 | 束草 大浦洞 外嶝峙 | | 石 | 12 | 5 | | 2 | | | | | | | 鰲山里式 |
| 5 | 襄陽 龍湖里 | | 石 | 3 | 1 | | | | | | | | | 鰲山里式, 区分系 |
| 6 | 襄陽 鰲山里Ｃ早期文化層 | | 石 | 34 | 2 | | | 8 | | | | | | 竹邊里式 |
| 7 | 襄陽 鰲山里Ａ Ⅴ層 | | 石 | 35 | 13 | | | | 1 | | | | | 鰲山里式 |
| 8 | 襄陽 鰲山里Ｃ ３~６号住居址, 隆起文土器文化層, 低湿地 | | 石 | 36 | 3 | | 5 | | | | | | | 鰲山里式 |
| 9 | 襄陽 鰲山里Ａ Ⅲ層 | | 石 | 2 | 2 | | | | | | | | | 鰲山里式 |
| 10 | 春川 校洞 | | 石 | 1 | 1 | | | | | | | | | 鰲山里式 |
| 11 | 江陵 草堂洞Ⅱ 287－14番地 | | 石 | 1 | 1 | | | | | | | | | 鰲山里式, 平底椀, 区分系・同一系 |
| 12 | 江陵 草堂洞Ⅱ | | 石 | 1 | | | | | | | | | | 鰲山里式, 区分系 |
| 13 | 江陵 草堂洞Ⅴ | | 石 | 4 | | | | | | | | 2 | | 鰲山里式, 同一系 |
| 14 | 蔚珍 竹邊 セトル村（燈臺地区） | | 石 | 6 | 4 | | | 1 | | | | | | 竹邊里式 |
| 15 | 蔚珍 竹邊 中路３－３号線 | | 石 | 34 | 7 | | 3 | | | | | | | 竹邊里式 |
| 16 | 蔚珍 竹邊里 15－68番地 | | 石 | 10 | 5 | 1 | | | | | | | | 鰲山里式 |
| 17 | 蔚山 細竹 | | 石 | 41 | 7 | 3 | 6 | | | | | | | 隆起文 |
| 18 | 蔚山 牛峰里 | | 石 | 2 | | | | | | | | | | 隆起文 |
| 19 | 蔚州 新岩里 第３地区 | | 石 | 4 | | | 1 | | | | | | | 隆起文 |
| 20 | 蔚州 新岩里（釜慶） | | 石 | 59 | 12 | 3 | 9 | | | | | 1 | | 隆起文 |
| 21 | 釜山 機張 月內里 | | 石 | 9 | | 2 | 1 | | | | | 4 | | 隆起文 |
| 22 | 釜山 東三洞 淨化地域９~７層 | | 石 | | | 1 | 1 | | | | | | | 隆起文 |
| 23 | 釜山 東三洞太宗臺進入道路 | | 石 | 5 | 1 | 2 | | | | | | | | 隆起文, 水佳里１式 |
| 24 | 釜山 東三洞 淨化地域５~４層 | | 骨 | 1 | | | | | | | 1 | | | 隆起文, 瀛仙洞式, 水佳里１・２式, 鳳溪里式 |
| 25 | | | 石 | 4 | | 1 | | | | | | 1 | | |
| 26 | 釜山 東三洞 淨化地域 ２層 | | 貝 | 1 | | | | 1 | | | | | | 栗里式 |
| 27 | 釜山 東三洞Ⅲ ４層 | | 骨 | 1 | | | | | | | | 1 | | 隆起文, 瀛仙洞式, 水佳里１式 |
| 28 | 釜山 東三洞Ⅰ ~ Ⅲ | | 石 | 5 | | | | | | | | | | 隆起文, 瀛仙洞式, 水佳里１・２式, 栗里式 |
| 29 | 釜山 凡方貝塚 13~７層 | | 石 | 6 | | 1 | 1 | | | | | 1 | 1 | 隆起文 |
| 30 | 釜山 凡方貝塚 ６・５層 | | 石 | 3 | 1 | | | | | | | 1 | | 隆起文, 瀛仙洞式, 水佳里１式 |
| 31 | 釜山 凡方遺跡 ６層 | | 石 | 9 | | 3 | 1 | | | | | 3 | | 隆起文, 瀛仙洞式, サルネ式 |
| 32 | 釜山 凡方遺跡 Ａ地区 ６－２・７層, Ｂ地区 溝 | | 石 | 12 | | 3 | 2 | | | | | 5 | | 隆起文 |
| 33 | 釜山 加德島 獐項 Ⅷ층 | | 石 | 1 | | | | | | | | 1 | | 隆起文, 瀛仙洞式, サルネ式, 水佳里１式 |
| 34 | 釜山 竹林洞 第３－Ｂピット13層 | | 石 | 1 | 1 | | | | | | | | | 隆起文 |
| 35 | 昌寧 飛鳳里 第２貝層 | | 石 | 1 | 1 | | | | | | | | | 隆起文 |
| 36 | 昌寧 飛鳳里 第１貝層 | | 石 | 5 | | | | | | | | 1 | | 瀛仙洞式, 隆起文, サルネ式 |
| 37 | | | 骨 | 1 | | | | | | | | 1 | | |
| 38 | 統營 煙臺島 Ｔ Ⅲ층 | | 骨 | 1 | | | | | | | | | 1 | 隆起文 |
| 39 | 統營 煙臺島 Ｊ Ⅳd·P~U Ⅱ層 | | 石 | 7 | 1 | | | | | | | | | 瀛仙洞式, 隆起文 |
| 40 | 統營 欲知島 Ｈ １層 | | 石 | 1 | | | | | | | | | | 隆起文, 瀛仙洞式 |
| 41 | 統營 欲知島 $G_4$ 貝層 | | 骨 | 2 | | | | | | | | | | 隆起文, 瀛仙洞式, 水佳里１式 |
| 42 | 麗水 安島 １층 | | 石 | 3 | 1 | | 1 | | | | | | | 竹邊里式, 隆起文 |
| 43 | 麗水 突山松島 | | 石 | 1 | | | | | | | | | | 隆起文, 瀛仙洞式, 栗里式 |
| 44 | 麗水 鏡島 內洞貝塚 ５層 | | 石 | 3 | | | | | | | | 1 | | 隆起文, 瀛仙洞式, 水佳里１・２式, 鳳溪里式 |
| 45 | 莞島 麗瑞島 | | 石 | 19 | | | | | | | | 1 | | 隆起文 |
| 46 | | | 骨 | 4 | | | | | 1 | | | | | |
| 47 | | | 貝 | 7 | | | | | 4 | | | | | |
| 48 | 濟州 沙溪里 ４層 | | 石 | 1 | | | | | | | | | | 隆起文, 瀛仙洞式, 鳳溪里式 |
| 49 | 新安 可居島 | | 石 | 1 | 1 | | | | | | | | | 隆起文, 瀛仙洞式, 鳳溪里式, 栗里式 |
| 50 | 群山 駕島 Ａ貝塚 ４層 | | 骨 | 1 | | | | | | | | | | 区分系・同一系, 栗里式 |
| 51 | 群山 ㄴ래섬 가地区 ３層 | | 骨 | 1 | | | | | 1 | | | | | 区分系, 区画反復文, 瀛仙洞式 |
| 52 | 群山 ㄴ래섬 가地区 ２層 | | 骨 | 1 | | | | | 1 | | | | | 瀛仙洞式, 区分系, 同一系, 栗里式 |

**表 4　結合式釣針針部の出土様相（金恩瑩2023から修正掲載）**

| No | 出土地 | 材質 | 総数 | 結合方式・結合部形態 | | | | | | | 不明 | 共伴土器 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 正面結合 | | | | 側面交叉 | | 上下結合 | | |
| | | | | 無結溝 | 溝 | 段（45°以下） | 段（45°以上） | 無結溝 | 溝 | 無結溝 | | |
| 1 | 蔚山 細竹 | | 9 | 內3 | 內2 | | | | | | 無3 | 隆起文 |
| 2 | 釜山 東三洞 淨化地域9～7層 | 骨 | 3 | 內1 | 外2 | | | | | | | 隆起文 |
| 3 | 釜山 東三洞 淨化地域 1住 | 骨 | 1 | | | | | | 外1 | | | 隆起文，瀛仙洞式，水佳里1式 |
| 4 | 釜山 東三洞 淨化地域5～4層 | 骨 | 1 | 內1 | | | | | | | | 隆起文，瀛仙洞式，水佳里1式 |
| 5 | | 牙 | 2 | | | | | | | | 外2 | |
| 6 | 釜山 東三洞 淨化地域 2層 | 角 | 1 | | | | | | 1 | | | 栗里式 |
| 7 | | 牙 | 1 | | | | | | | | 外1 | |
| 8 | 釜山 東三洞Ⅰ 5層 | | 4 | | 外2 | | 1 | | | | | 隆起文，瀛仙洞式，水佳里1・2式 |
| 9 | | | | | 1 | | | | | | | |
| 10 | 釜山 東三洞Ⅰ～Ⅲ | | 10 | 1 | 內1 | | | 外1 | | | 外1 | 隆起文，瀛仙洞式，水佳里1・2式，栗里式 |
| 11 | | | | | 3 | | | 無1 | | | | |
| 12 | 釜山 凡方貝塚 13～11層 | 骨 | 7 | | 內3 | | | | | | | 隆起文 |
| 13 | | | | | 4 | | | | | | | |
| 14 | 昌寧 飛鳳里 第1貝層 | 牙 | 1 | | 1 | | | | | | | 瀛仙洞式，隆起文，サルネ式 |
| 15 | 統營 煙臺島 P～U Ⅲ層 | 骨 | 5 | | 內1,3 | | | | | | 內1 | 隆起文 |
| 16 | | 牙 | 1 | | 1 | | | | | | | |
| 17 | 統營 欲知島 石積の下層 | 角 | 1 | | | | 外1 | | | | | 隆起文，瀛仙洞式，水佳里1式 |
| 18 | 統營 上老大島 Ⅴ～Ⅱ層 | 牙 | 5 | | | 外1 | 外2 | | | 外1 | 多1 | 隆起文，瀛仙洞式，水佳里1式，栗里式 |
| 19 | 泗川 舊坪里 | 骨 | 1 | | | | 外1 | | | | | 栗里式，鳳溪里式 |
| 20 | 麗水 突山松島Ⅱ Ⅲ-c 層 | 骨 | 1 | 外1 | 內1 | | | | | | | 隆起文 |
| 21 | 麗水 安島 Ⅰ層 | | 5 | 5 | | | | | | | | 竹邊里式，隆起文 |
| 22 | 麗水 巨文島 | 牙 | 1 | | | | 外1 | | | | | 隆起文，鳳溪里式 |
| 23 | 莞島 麗瑞島 | 骨 | 43 | 內4 | 內2 | 內5 | | | | | 內1 | 隆起文 |
| 24 | | | | 外1 | 外1 | 4 | | | | | | |
| 25 | | | | 無1 | 12 | | | | | | | |
| 26 | | | | 1 | | | | | | | | |
| 27 | | 貝 | 3 | | 內2 | | | | | | | |
| 28 | | | | | 1 | | | | | | | |
| 29 | 濟州 下摹里 | 牙 | 3 | | | | 3 | | | | | 栗里式 |
| 30 | 新安 可居島 | | 3 | 內1 | | | 外2 | | | | | 隆起文，瀛仙洞式，鳳溪里式，栗里式 |
| 31 | 群山 駕島 A 貝塚 1層 | 骨 | 1 | | 內1 | | | | | | | 瀛仙洞式，区分系，同一系，栗里式 |
| 32 | 群山 ノレソム 가地区 3層 | 骨 | 1 | | 內1 | | | | | | | 区分系，区画反復文，瀛仙洞式 |
| 33 | 群山 ノレソム 가地区 2層 | 骨 | 3 | | 內1 | | 1 | | | | | 瀛仙洞式，区分系，同一系，栗里式 |

※内：内鍼式　外：外鍼式　無：無鍼式　多：多鍼式

## （2）結合式釣針について

まず、韓半島での結合式釣針の展開過程で重要と理解しなければならないことは、既存の鰲山里型結合式釣針と呼ばれる「石製軸部＋骨製針部」の結合式釣針と、「貝製軸部＋骨製針部」の結合式釣針は、存続期間と系統がそれぞれ異なる別個の結合式釣針であると考えられることである。このことを説明するために、結合式釣針の出土様相をいま一度提示したものが表3と4である。結合式釣針の属性別分類は、前稿（金恩瑩 2023）を参考にしていただきたい《軸部の分類は19頁参考図参照：訳者》。

黒曜石と同様に、石器と骨角器の帰属時期は、単純時期の遺跡や、文化層から出土して時期を限定できる資料を基準として判断する。表3によれば、石製軸部は竹邊里式土器、鰲山里式土器、隆起文土器と確実に共伴する。結合式釣針において重要な属性である結合方法において、石製軸部は襄陽の

鰲山里遺跡出土の１点（註６）を除けばすべて正面結合式で、側面交差式や上下結合式の確実な事例はないことを強調しておきたい。統営の煙臺島遺跡Ｔピット Ⅲ層から出土した骨製軸部と、莞島の麗瑞島遺跡から出土した貝製軸部は、隆起文土器と確実に共伴することとともに、正面結合式軸部という点で石製軸部の変異と判断される。したがって、石製軸部を核心的要素とする鰲山里型結合式釣針の組成に、骨製と貝製軸部もごく少量であるが含まれる。

瀛仙洞式土器段階は、単純時期の遺跡や包含層から出土した事例はないが、ノレソム遺跡가地区３層から結合式釣針と共伴する瀛仙洞式土器を根拠に推論することができる。結合式釣針は、基本的に中西部地域では使用されない漁撈具であり、ノレソム遺跡가地区３層から主体的に出土する中西部系統の区分系・区画反復文土器と関連することはなく、少量ではあるが南部地域系統の瀛仙洞式土器とともに拡散したとみられる。ところで、ここから出土した軸部は骨製だが、正面結合式に溝という要素もみられ、石製軸部から変異したと判断される。これを根拠とするなら、瀛仙洞式土器が主体をなし、隆起文土器とサルレ式土器が少量混入している飛鳳里貝塚第１貝層から出土した５点の石製軸部と１点の骨製軸部という組成は、瀛仙洞式土器段階の結合式釣針軸部の様相を反映している可能性がある。

石製軸部は、以降のサルレ式土器・水佳里式土器・鳳溪里式土器・栗里式土器との明確な共伴関係がない。江陵の草堂洞遺跡、釜山の東三洞貝塚と加徳島の獐項遺跡、統営の欲知島遺跡、麗水の鏡島遺跡のように、中期の水佳里Ⅰ式土器と竹邊里式土器・隆起文土器が混在した層から石製軸部が検出された場合があるが、いままで水佳里Ⅰ式土器が単独で出土する多くの遺跡から石製軸部が出土した事例はないため、竹邊里式土器・隆起文土器に帰属させることは妥当であると考えられる。

石製軸部と結合する針部に関してみると（表４）、竹邊里式土器と共伴関係が確実な針部はないが、麗水の安島貝塚１層から竹邊里式土器・隆起文土器とともに出土した釣針（図２－１）５点がこの段階に該当する可能性がある。無鏃式・無結溝・正面結合式軸部という特徴を持つ特異な形態で、隆起文土器と共伴する針部にはみえないためだ。隆起文土器には無結溝と溝の正面結合式・結合角度45°以下の段になる針部が共伴する。蔚山の細竹遺跡をはじめとして、東三洞貝塚９～７層、凡方貝塚13～11層、統営の煙臺島Ｐ～Ｕピット Ⅲ層、麗水の突山松島遺跡２次調査区域Ⅲ -c 層、莞島麗瑞島遺跡から隆起文土器との共伴関係が確認できる。瀛仙洞式土器段階の共伴事例は、群山のノ래섬遺跡가地区３層出土の正面結合式・溝の針部が該当する。前期の竹邊里式土器と隆起文土器、瀛仙洞式土器に共伴する針部はすべて正面結合式であり、軸部と針部の結合関係が整合的である。

したがって、いわゆる鰲山里型結合式釣針は、正面結合式で石製軸部と骨製針部が重要な特徴で、時期的には新石器時代前期、空間的には韓半島中東部～南部地域、すなわち、広口土器分布圏（表１の太い実線での表示部分）で使用される漁撈具だったと判断される。

一方、韓半島南部地域では、鳳溪里式～栗里式土器と共伴する一群の結合式釣針が存在する。軸部には、釜山の東三洞貝塚浄化地域２層から栗里式土器に共伴して出土した貝製軸部がある（図２－22)。無結溝・側面結合式軸部である。同じ貝製軸部といっても隆起文土器に共伴する莞島の麗瑞島遺跡出土の溝・正面結合式軸部とはまったく異なる形態である。

針部は、泗川の舊坪里遺跡から出土した結合角度45°以上の正面結合式釣針針部がある（図２－17)。泗川の舊坪里遺跡は鳳溪里式土器と栗里式土器が出土したために、時期を後期に限定することができる。これと同じ型式が、統営の上老大島貝塚（延世大)、麗水の巨文島遺跡、新安の可居島遺跡、済州の下慕里遺跡、群山のノレソム遺跡가地区２層から出土した。これらの遺跡からは多様な時期の土器が混在しているが、共通なのは鳳溪里式土器と栗里式土器が出土することで段・45°以上正面結合

式針部を後期に帰属させても、大きな問題はないと考えられる（註７）。鏃が確認される場合、大部分は外鏃式である。

時期をもっと限定することができる針部は、釜山の東三洞貝塚浄化地域２層から栗里式土器と確実に共伴する外鏃式・溝・側面交差式針部がある（図２－19･20）。１点は骨製、残り１点はイノシシの奥歯で作られた牙製である。ところで、東三洞貝塚浄化地域１号住居跡からは、これと類似した外鏃式・溝・側面交差式針部１点が完形で出土した（図２－12）。１号住居跡からは隆起文、瀛仙洞式、水佳里Ⅰ式土器が出土し、時期を特定することは難しいが、新石器時代前期の針部とはみられない反面、栗里式土器に確実に共伴する事例があるという点から、水佳里Ⅰ式土器に帰属させることが現在ではもっとも妥当のようである。外鏃式・溝・側面交差式針部が、水佳里Ⅰ式段階に出現し、栗里式土器段階まで存続するかどうかは、鳳溪里式土器・水佳里Ⅱ式土器段階の明確な資料がないため、現在判断することが難しい。

上老大島遺跡Ⅳ層とⅤ層から出土した外鏃式・無結溝・上下結合式針部２点（図２－21，孫寶基1982の図31の下段中）は、Ⅴ層から出土した瀛仙洞式土器、水佳里Ⅰ式土器、鳳溪里式土器のなかでどの一時期かに帰属すると推定される。ところで、九州地域からの類似した形態の出現時期が、縄文後期前葉の坂の下式土器段階であるとすれば、韓半島からも後期以降に出現した可能性が高い。

以上により、韓半島南部地域では、新石器時代後期以降に側面結合式貝製軸部と、側面結合式・上下結合式骨（牙）製針部、結合角度45°以上正面結合式骨製針部が、新たに出現したとすることができる。石製軸部がないという点が注目され、結合方式の溝や段の形態は多様であるが、外鏃式が優勢だという特徴をみせる。東三洞浄化地域１号住居跡出土の外鏃式・溝・側面交差式針部が水佳里Ⅰ式土器段階まで遡るとしても、サルネ式土器段階という空白期があるために、新石器時代後期の結合式釣針は前期の鰲山里型結合式釣針とは、系統を別にするという組成と判断される。

**（３）組合式銛頭・石鋸について**

次は鋸歯状尖頭器と石鋸で構成される石製組合式銛頭について考えたい。筆者は前稿で、刃部を大きく剥離して鋸刃を作ったものと、刃部を小さく剥離して鋸刃を作ったものとを区分した（金恩瑩2023a）。本稿では便宜的に、大きな鋸刃の組合式銛頭と小さな鋸刃の組合式銛頭と呼ぶこととする。この２つの型式は、以下のように鋸刃の大小のみならず鋸刃の作出方式、形態、石材からよりはっきりと差をみいだせる。

＊大きな鋸刃の組合式銛頭は、基本的に鋸刃が大きく、鋸刃の間隔が比較的広い。鋸刃の先端部が尖って作出され、黒曜石以外にも頁岩、サヌカイトなど多様な石材で製作されている。鋸歯状尖頭器の全体の平面形態は二等辺三角形で、基部の抉りが顕著である。

＊小さな鋸刃の鋸歯状尖頭器は、鋸刃が細かく、鋸刃の間隔が狭い。平面的に鋸刃の先端部が丸く、黒曜石だけで製作される。鋸歯状尖頭器の全体の平面形態は二等辺三角形と推定され、基部の抉りが弱い。

大きな鋸刃の組合式銛頭は、高城の文岩里遺跡Ⅶ-２層出土品に代表され、南部地域では蔚州の新岩里遺跡から鋸歯状尖頭器のみ、総数９点が出土した。高城の文岩里の出土品は二等辺三角形に近い鋸歯状尖頭器と、袋状の挿入部をわずかに角張らせて処理した石鋸がセットで検出された。報告書では、石材が黒曜石と記述されているが、報告者に確認した結果、黒曜石ではないことが判明した。蔚州の新岩里からは黒曜石が６点、サヌカイトが３点あり、平面形態が二等辺三角形、細長い二等辺三角形など多様である。高城の文岩里遺跡Ⅶ-２層出土品は鰲山里式土器段階に属し、南部地域の隆起文土器２段階、すなわち蔚州の新岩里遺跡と同じ時期に該当する（金恩瑩 2024）。時期的に確実な事

例ではないが、釜山の東三洞でも大きな鋸刃の鋸歯状尖頭器が出土しており、細長い二等辺三角形で鋸刃が大きく、鋭く製作されている。報告者は硬質の粘板岩と推定している（及川民次郎 1933）。

ところで、対馬島の越高遺跡と上老大島遺跡Ⅴ層からは、平面形態が正三角形に近く基部の抉りの度合いが若干弱い鋸歯状尖頭器が出土して注目される。両方とも鋸刃の間隔が狭いほうであるが、鋸刃の先端部が尖っていて、黒曜石ではない石材で製作されていることから、同じ型式に分類することができる。時期的に越高遺跡から出土した頁岩製の鋸歯状尖頭器（図２－９）は、隆起文土器の２～３段階（金恩瑩 2024）に確実に帰属する。上老大島遺跡Ⅴ層出土品（孫寶基1982 図20の２段右）は、同じ遺跡のⅡ層から出土した黒曜石製の小さな鋸刃の鋸歯状尖頭器（図２－23･24）とは、鋸刃の作出方法が異なる（註８）。Ⅴ層からは隆起文土器、瀛仙洞式土器、水佳里Ⅰ式土器、鳳溪里式土器が混在しており明確な時期はわからないが、①瀛仙洞式土器～鳳溪里式土器には組合式銛頭の明確な出土事例がない、②同じような型式である越高遺跡出土品は隆起文土器と共伴している、③同じ遺跡の

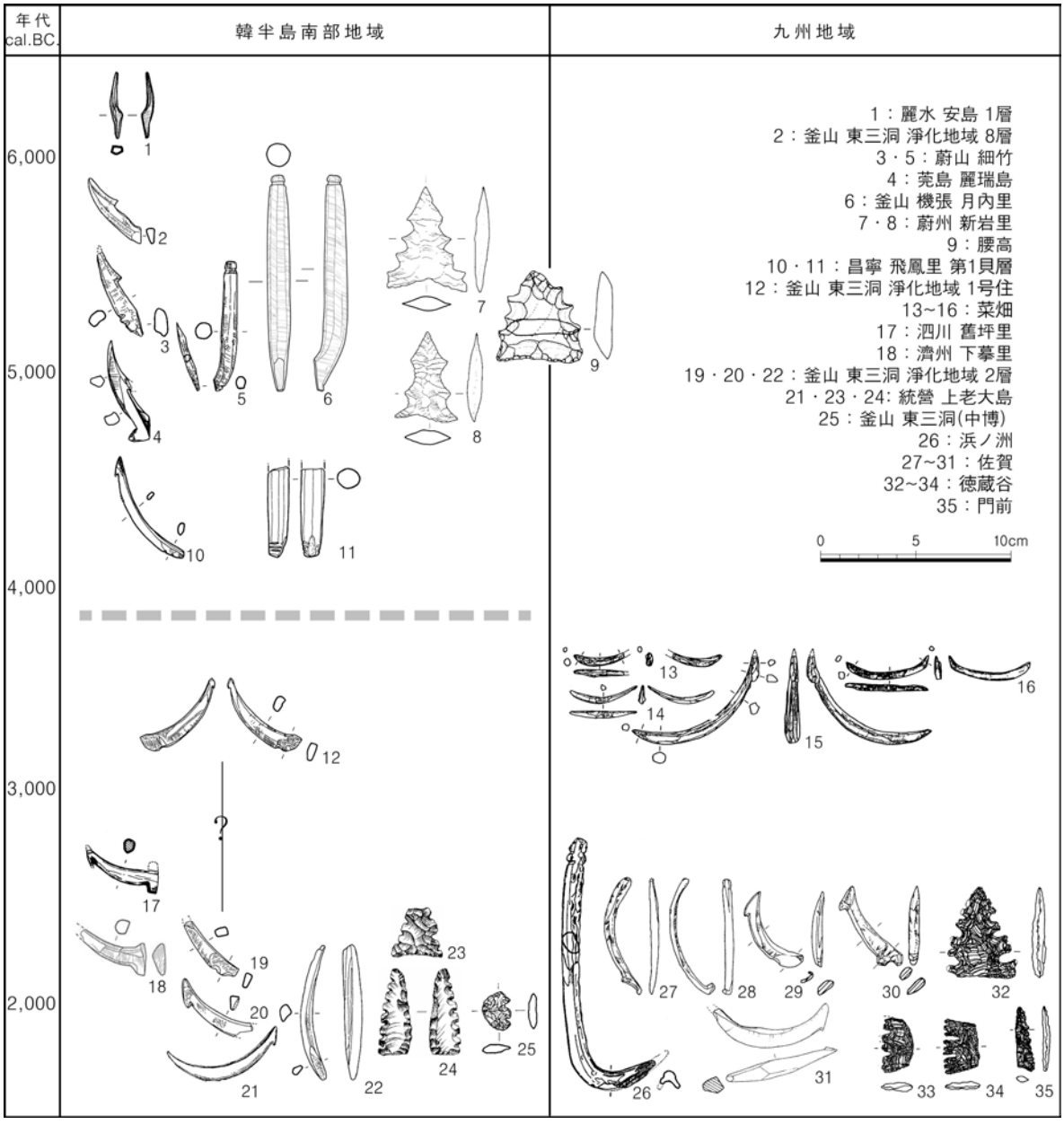



**図２　韓半島南部地域と日本九州地域の結合式釣針と組合式銛頭**

Ⅱ層から出土した小さな鋸刃の鋸歯状尖頭器（中期以降）と型式学的に異なる、といった点を根拠に上老大島遺跡Ⅴ層の組合式銛頭を隆起文土器段階と判断しても大きな問題はないといえる。上老大島遺跡Ⅴ層の隆起文土器は隆起文土器３段階と同じか、若干遅い段階で越高遺跡の時期とも整合的である。したがって、越高遺跡と上老大島遺跡Ⅴ層出土の組合式銛頭は、鋸刃の間隔が狭いが、鋸刃の製作方法と非黒曜石製に共通する要素がみえ、大きな鋸刃の組合式銛頭に含まれる可能性が高く、時期的にも大きな鋸刃の組合式銛頭とまったく同時期に存在するために、大きな鋸刃の組合式銛頭の南海岸地域の変異として把握できる。

結論的には、大きな鋸刃の組合式銛頭は、鰲山里型結合式釣針とともに韓半島中東部から南部地域にかけて（竹邊里式土器・）鰲山里式土器、隆起文土器段階に使用された広口土器の漁撈具のセットと推定される。新石器時代を通して、黒曜石がもっとも多く搬入された時期の漁撈具の様相である。

一方、小さな鋸刃の組合式銛頭は、南海岸地域でのみ確認されるが、すべて時期を特定することが難しい。石鋸は釜山の東三洞貝塚浄化地域と麗水の安島遺跡の攪乱層から１点出土し、東三洞貝塚の国立中央博物館１次調査区域１層から１点、東三洞貝塚の国立中央博物館２次調査区２層から２点（図２－25)、上老大島貝塚Ⅱ層から１点（図２－24）が出土した。袋部に挿入する面が丸いものと直線的なものがある。鋸歯状尖頭器は上老大島遺跡Ⅱ層から１点出土した（図２－23)。これらはすべて刃部を細かく剥離して鋸刃を作っており、石材はすべて黒曜石である。東三洞貝塚１次の１層と東三洞貝塚２次の２層からは、隆起文土器、瀛仙洞式土器、水佳里１式土器、栗里式土器が出土し、時期の特定が難しいが上老大島貝塚Ⅱ層の場合、水佳里１式土器と栗里式土器が出土しており、韓半島南部地域では中期の水佳里１式土器以降の時期と限定することができる。

ところで、小さな鋸刃の組合式銛頭は、九州地域で縄文時代中期末～後期初頭以降に相当多くの遺跡から多様な形態で出現する。韓半島の小さな鋸刃の組合式銛頭と南海岸地域、特に韓日交流関係遺物が出る遺跡から出土する点、すべて黒曜石という点から、九州地域からの搬入または影響を受けたものと推定される。そうならば、九州地域での小さな鋸刃の組合式銛頭の出現時期である韓半島南部地域の栗里式土器段階以降と判断することは妥当ではないであろう。先述した貝製軸部＋骨牙製針部で構成される多様な結合方法の結合式釣針が使用された時期に、小さな鋸刃の組合式銛頭が出現したということであり、韓半島南部地域に黒曜石がまた搬入された時期に該当する。

**（４）韓日交流と漁撈具について**

韓半島の新石器時代は、紀元前3,800年を前後する時期に、中西部地域の尖底土器が韓半島全体に拡散しながら、中東部と南部地域では土器だけでなく、石器・骨角器・装身具などの道具組成も大きく変わる。中東部と南部地域は新しい系統の生業体系と社会に転換する。筆者は、これらを前期と中期を区分する画期とみなしている。したがって、本稿で検討する漁撈具も、正面結合式で石製軸部＋骨製針部で構成される、いわゆる鰲山里型結合式釣針と大きい鋸刃の組合式銛頭は新石器時代前期まで使用され、新石器時代中期以降、特に後期に貝製軸部＋骨牙製針部で構成される多様な結合方法の結合式釣針と小さな鋸刃の組合式銛頭が系統を違えて形成されたとみている。このような結果に基づき、九州地域の結合式釣針と組合式銛頭との併行関係を示したものが図２である。

日本では以前、縄文時代早期末葉から前期初頭の最温暖期を中心とする時期（紀元前5,000年紀から4,000年紀中葉）と縄文時代後期（紀元前3,000年紀末から2,000年紀）の二時期に漁民の活動が顕著になり、そのことは貝塚の形成と、韓半島南部地域と九州地域に共通して分布する先史時代の漁撈具に現れたとする見解があった（甲元眞之 1999)。その代表的なものが、西北九州型結合式釣針と組合式銛頭である。

長い間、西北九州型結合式釣針の源流は韓半島の鰲山里型結合式釣針で、新石器時代の韓日交流の象徴として考慮されてきた（水ノ江 2015)。しかし、筆者は九州地域での結合式釣針の石製軸部の唯一の出土例である大矢遺跡の資料に対して、形態的類似性が不十分で決定的に九州地域縄文時代後期初頭に該当するという時期的な隔たりに問題があることを指摘し、鰲山里型結合式釣針が西北九州型結合式釣針に影響を与えなかったという見解を提示した（金恩瑩 2007)。最近日本でも、西北九州型結合式釣針は菜畑遺跡出土例（図２－13～16）（註９）を除外すれば、縄文後期以降に出現すると整理されている（中尾 2009)。また、材質と上下結合式という結合方法の差において、鰲山里型結合式釣針との関連性に対して、懐疑的な意見が提示された（中尾 2009･2013、水ノ江 2015)。

先述したように、韓半島南部地域では東三洞貝塚１号住居跡出土の１点を除き、後期（鳳溪里式・二重口縁土器段階）に骨製・貝製軸部＋牙製針部の結合式釣針が新たに出土した。結合角度45°以上の正面結合式・段針部が統営以西地域に分布し、統営～釜山地域では側面結合式で貝製軸部と側面結合式・上下結合式針部が確認された。釣針が残存する場合は、大部分外鎚式である。西北九州地域では、いままで15遺跡から軸部19点、針部33点が出土しているが、菜畑遺跡出土の４点を除外すれば、縄文時代後期初頭（坂の下式・南福寺式土器）から後期中葉（宮ノ下式・辛川式土器）という、韓半島南部と似た時期、または若干遅れる時期に結合式釣針が出現することになる（水ノ江 2015)。縄文時代後期以降には上下結合式が主体となり、側面交差式が少数存在し（註10)、外鎚式になる。側面交差式軸部と針部を結合するための、溝を作り出すことが特徴という。

東三洞貝塚１号住居跡と菜畑遺跡出土の側面結合式針部は、軸部との結合部分が溝と無結溝に差があり明確な帰属時期がまだ不明であるため、両者の関連性を議論することは時期尚早のようである。ところで後期以降、韓半島南海岸で出現する結合式釣針の骨製・貝製軸部＋骨・牙製針部は材質と溝・側面結合式針部、外鎚式形態などは、西北九州地域との交流関係のなかで説明することができる。また、上老大島遺跡出土の上下結合式針部は、西北九州地域から流入されたものと推定される。

西北九州地域では、縄文時代中期末（阿高式）から後期中葉（西平式）に鋸歯状尖頭器・石鋸（図２－32～35）が活発に使用されるという（久我谷 2016)。縄文時代後期に現れる組合式銛頭が韓半島隆起文土器段階の大きな鋸刃の組合式銛頭と関連性がないという点は、筆者も完全に同じ見解である。しかし、新石器時代後期後半に韓半島南海岸地域に現れた黒曜石製の小さな鋸刃の組合式銛頭は、西北九州地域の鋸歯状尖頭器・石鋸と関連して出現したようにみえる。

結果的に、「韓半島と九州に共通して分布する先史時代漁撈具」の登場は、新石器時代後期に該当する様相と理解される。これは新石器時代後期以降に九州地域から搬入された黒曜石が、韓半島南部の内陸地域まで拡散するなど、両地域の交流がまた活発になるという様相とも整合的である。海洋漁撈がもっとも活発だった新石器時代前期より後期に、漁撈具を通じた韓日交流関係がより強化された理由については、今後解決しなければならない課題であるが、韓半島南海岸地域と九州地域の漁民の直接的な漁撈活動により、韓日共同の「漁撈文化圏」が形成されたことは確かな事実である。

## ３　漁撈文化圏を巡る韓日交流の動態

韓日交流には画期が存在して、時期ごとに交流の様相が変化するということは、多くの研究者が指摘してきたところである（林尚澤 2008、古澤 2013・2018)。既存研究と重なるが、今回筆者が検討した黒曜石と漁撈具を通じてみた韓日交流の様相は、新石器時代前期と中期以降とで異なる展開をみせたことが明らかになった。

新石器時代前期に韓半島南部地域では、新石器時代を通じてもっとも多くの黒曜石が九州地域から

搬入された。特に、隆起文土器の人々は海を越えて対馬島を拠点として、九州島の黒曜石を入手したようにみえる。このことをよく示してくれる遺跡が対馬島の越高遺跡である。ところで、越高遺跡では、隆起文土器にしばしば共伴する石製軸部の結合式釣針が出土していない。Ｂ地点からは組合式銛頭、Ａ地点から磨製石槍型銛頭が出土したのみで、隆起文土器段階にもっとも一般的な漁撈具である石製軸部の結合式釣針が出土しないという事実は、対馬島の海洋環境が結合式釣針の使用に適合せず、対馬島に渡った人々が漁撈を目的にしたのではなく、黒曜石を目的にしたのではないかと考えられる。

新石器時代前期の隆起文土器段階に、韓半島南部からは先に検討した石製軸部＋骨製針部の結合式釣針と、大きな鋸刃の組合式銛頭のほかにも、有孔尖頭器と骨製銛頭で構成される漁撈具のセットが著しき発達する。反面、九州では漁網錘、骨製刺突具が基本的な構成で、部分的に石銛と呼ばれる単式の石製銛頭が散見されるなど、両地域には共通する漁撈具がまったくみられない。結果的に韓半島南部地域の人々が、黒曜石を搬入する目的で渡航しながら韓日間での接触をもたらしたが、お互いに異なった漁撈体系であったため、漁撈具を通じた交流はおこなわれなかったのではないかと考えられる（註11）。

韓半島の前期から中期への変化は、中西部地域の尖底土器の拡散からはじまった。その開始は瀛仙洞式土器段階であり、土器ではごく少量であるが口縁限定押圧短斜線文土器が出土し、石器では漁網錘と前後運動による磨棒・磨盤が出土しはじめる。サルレ式土器は中西部地域の尖底土器が南部地域に拡散した様相とみることができ、その流れが続いて韓日交流も韓半島から九州へ一方的な方向性として展開したと考えられている（古澤2018）。その時まで黒曜石に関する情報がなかった中西部地域の道具組成と生業体系が南部地域に影響力を拡散させることで、九州地域からの黒曜石の搬入もほぼ停止され、土器や異なった文化要素も受け入られなかったのではないかと考えられる。

しかし、中西部地域の尖底土器が、南部地域で在地化したとされる水佳里１式土器段階からは、また日本との双方向交流が生じる。特に、後期になると韓半島南部地域で前期とは異なる形態の貝製軸部＋骨（牙）製針部の結合式釣針と石製組合式銛頭、漁網錘で構成される異なった系統の漁撈具が出現する。ほぼ同時期に日本の九州地域でも西北九州型結合式釣針、単式釣針、鋸歯状尖頭器・石鋸という漁撈具の組合せが発達する。韓日両地域が、それぞれ独自に漁撈具を持ちながらも、類似した形態の結合式釣針と組合式銛頭を共有するのである。隆起文土器段階に韓半島南部地域に搬入された黒曜石では、おもに石鏃が製作される反面、後期栗里式土器段階に搬入された黒曜石は鋸歯状尖頭器と石鋸という漁撈具であったということから、この時期の韓日交流における漁撈の役割を理解することができる。

そうであるなら、新石器時代後期以降に漁撈民による韓日交流が生じ、新しい系統の漁撈具が出現した背景とはどういうものであろうか。土器の出土様相を通じて韓半島南部地域の遺跡の占有時期をみると、表５により若干の糸口を得ることができる。周知のように、新石器時代前期の隆起文土器・瀛仙洞式土器段階には大きな川の河口、海岸、沿岸と外海島嶼地域の遺跡がおもに分布している。サルレ式土器段階には全体的に遺跡数が減り、水佳里１式土器段階にはまた増加するが、これらはおもに内陸地域に拡散する。それから、鳳溪里式土器以降になると、内陸地域での拡散とともに、河口、海岸、沿岸と外海島嶼地域まで分布が拡大する傾向が現れる。島嶼地域の場合、前期の土器出土量に比べて顕著に少ない量ではあるが、後期以降の遺跡数は漁撈がもっとも発達した隆起文土器段階に匹敵する程度の水準である。新石器時代後期に生活圏が内陸に拡大しただけではなく、海への進出も活発になったことを示している。このような遺跡立地の変化が、新石器時代後期の漁撈を通じた韓日交流の活性化を説明してくれるのではないかと考えられる。

## 表５－１　韓半島南部地域遺跡の土器出土様相

| No. | 遺跡名 | 高山里式/梧津里式 | 竹邊里式 | 隆起文 | 瀛仙洞式 | サルネ式 | 水佳里1式 | 水佳里2式 | 鳳溪里式 | 栗里式 | 遺跡立地 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 金泉 松竹里 김천 송죽리 | | | ○ | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ | 內陸 |
| 2 | 金泉 知佐里 김천 지좌리 | | | | | | | | ○ | ○ | 內陸 |
| 3 | 大邱 流川洞 대구 유천동 | | | | | | ○ | | | ? | 內陸 |
| 4 | 大邱 大鳳洞 대구 대봉동 | | | | | ○ | | ○ | | ○ | 內陸 |
| 5 | 大邱 西邊洞 대구 서변동 | | | | | | | ○ | | ○ | 內陸 |
| 6 | 大邱 檢丹洞 대구 검단동 | | | | | | ○ | | | | 內陸 |
| 7 | 大邱 公平洞 대구 송평동 | | | | | | ○ | | | ? | 內陸 |
| 8 | 大邱 大泉洞 대구 대천동 | | | | | | | | | ○ | 內陸 |
| 9 | 陜川 鳳溪里 합천 봉계리 | | | | | | | | ○ | | 內陸 |
| 10 | 居昌 大也里 거창 대야리 | | | | | | | | ○ | | 內陸 |
| 11 | 居昌 壬佛里 거창 임불리 | | | | | | | | ○ | | 內陸 |
| 12 | 山淸 江樓里 산청 강루리 | | | | | | | | ○ | | 內陸 |
| 13 | 山淸 召南里 산청 소남리 | | | | ○ | | | | ○ | | 內陸 |
| 14 | 靑道 梧津里 청도 오진리 | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 內陸 |
| 15 | 慶州 龍江洞 경주 용강동 | | | | | | | ? | ? | | 內陸 |
| 16 | 慶州 隍城洞 267 경주 황성동 267 | | | | ○ | | | | | | 內陸 |
| 17 | 慶州 茸長里 경주 용장리 | | | | | | | | | ○ | 內陸 |
| 18 | 蔚山 中山洞 139 울산 중산동 139 | | | | | | | ○ | | ○ | 內陸 |
| 19 | 蔚山 弓根亭理 울산 궁근정리 | | | | | | ○ | | | ○ | 內陸 |
| 20 | 蔚州 泗淵里 울주 사연리 | | | | | | ○ | | | | 內陸 |
| 21 | 蔚州 立岩里 울주 입암리 | | | | | | ○ | | | | 內陸 |
| 22 | 金海 匙山里 김해 시산리 | | | ○ | | | ○ | ○ | | ○ | 內陸 |
| 23 | 密陽 琴川里 밀양 금천리 | | | | | | | | ○ | ○ | 內陸 |
| 24 | 密陽 サルネ 밀양 살내 | | | | ? | ○ | | | | | 內陸 |
| 25 | 昌寧 飛鳳里 창녕 비봉리 | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | ○ | 內陸 |
| 26 | 咸安 道項里 함안 도항리 | | | | ○ | | | | | | 內陸 |
| 27 | 河東 橫川里 하동 횡천리 | | | | | | | | ○ | | 內陸 |
| 28 | 鎭安 チングヌル 진안 진그늘 | | | | | | ○ | | | | 內陸 |
| 29 | 鎭安 ガルモリ（葛頭）진안 갈머리 | | | | | | ○ | | ○ | ○ | 內陸 |
| 30 | 光州 老大洞 광주 노대동 | | | | | | | | ○ | ○ | 內陸 |
| 31 | 河東 牧島 하동 목도 | | | ○ | ○ | ○ | | ○? | ○ | | 江 河口 |
| 32 | 晉州 草長洞 진주 초장동 | | | | | | ○ | | ○ | | 江 河口 |
| 33 | 晉州 平居洞 진주 평거동 | | | | | | ○ | | ○ | | 江 河口 |
| 34 | 晉州 上村里 진주 상촌리 | | | | | | ○ | | ○ | | 江 河口 |
| 35 | 晋州 貴谷洞 大村 진주 귀곡동 대촌 | | | | | | | | | ○ | 江 河口 |
| 36 | 蔚山 夫谷洞 울산 부곡동 | | | | ○ | ○ | | | | | 江 河口 |
| 37 | 釜山 金谷洞 栗里 부산 금곡동 율리 | | | | | | | | | ○ | 江 河口 |
| 38 | 釜山 北亭 부산 북정 | | | ○ | ○ | | ○ | | | ○ | 江 河口 |
| 39 | 釜山 竹林洞 부산 죽림동 | | | ○ | | | | | | | 江 河口 |
| 40 | 金海 花木洞 김해 화목동 | | | | ○ | | ○ | | ○ | ○ | 江 河口 |
| 41 | 光陽 烏沙里 敦卓 광양 오사리 돈탁 | | | | | ○ | ○ | | ○ | ○ | 江 河口 |
| 42 | 慶州 臺本里 경주 대본리 | | | ○ | ○ | | | | | | 海岸 |
| 43 | 慶州 下西里 경주 하서리 | | | | ○ | | ○ | | | | 海岸 |
| 44 | 慶州 奉吉里 경주 봉길리 | | | | | | ○ | | | | 海岸 |
| 45 | 蔚山 山下洞 化岩 울산 산하동 화암 | | | | | | ○ | | | | 海岸 |
| 46 | 蔚山 華亭 川內烽燧 울산 화정 천내봉수 | | | | ○ | | | | | | 海岸 |
| 47 | 蔚山 細竹 울산 세죽 | | ○ | ○ | | | | | | | 海岸 |
| 48 | 蔚山 黃城洞 울산 황성동 | | | ○ | ○ | | ○ | | | | 海岸 |
| 49 | 蔚山 牛峰里 울산 우봉리 | | | ○ | | | | | | | 海岸 |
| 50 | 蔚州 新岩里 울주 신암리 | | | ○ | | | ○ | | | | 海岸 |
| 51 | 釜山 機張 月內里 부산 기장 월내리 | | | ○ | | | | | | | 海岸 |
| 52 | 釜山 多大浦 부산 다대포 | | | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | 海岸 |
| 53 | 金海 水佳里 김해 수가리 | | | | ○ | | ○ | ○ | | ○ | 海岸 |
| 54 | 釜山 凡方 부산 범방 | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | ○ | 海岸 |
| 55 | 釜山 細山 부산 세산 | | | ○ | | | | | ○ | ○ | 海岸 |
| 56 | 昌原 南門洞 창원 남문동 | | | ○ | | | | | | ○ | 海岸 |
| 57 | 泗川 船津里 사천 선진리 | | | ○ | ○ | | ○ | | ○ | ○ | 海岸 |
| 58 | 泗川 舊坪里 사천 구평리 | | | | | | | | | ○ | 海岸 |
| 59 | 咸平 長年里 堂下山 함평 장년리 당하산 | | | | ○ | ○ | | | ○ | | 海岸 |
| 60 | 釜山 東三洞 부산 동삼동 | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 沿岸島嶼 |
| 61 | 釜山 朝島 부산 조도 | | | | ○ | ○ | ○ | | ○ | | 沿岸島嶼 |
| 62 | 釜山 瀛仙洞 부산 영선동 | | | | ○ | | | | | | 沿岸島嶼 |
| 63 | 釜山 加德島 獐項 부산 가덕도 장항 | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | 沿岸島嶼 |
| 64 | 昌原 椽島 창원 연도 | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 沿岸島嶼 |
| 65 | 南海 唐項里 남해 당항리 | | | | | | | | ○ | | 沿岸島嶼 |
| 66 | 泗川 勒島 사천 늑도 | | | ○ | | ○ | ○ | | ○ | ○ | 沿岸島嶼 |
| 67 | 麗水 鏡島 여수 경도 | | | ○ | ○ | | ○ | | ○ | ○ | 沿岸島嶼 |

**表５－２　韓半島南部地域遺跡の土器出土様相**

| No. | 遺跡名 | 高山里式/梧津里式 | 竹邊里式 | 隆起文 | 瀛仙洞式 | サルネ式 | 水佳里1式 | 水佳里2式 | 鳳溪里式 | 栗里式 | 遺跡立地 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 68 | 群山 ノレソム 군산 노래섬 | | | | ○ | | | | ○ | | 沿岸島嶼 |
| 69 | 群山 駕島 군산 가도 | | | | ○ | | | | ○ | ○ | 沿岸島嶼 |
| 70 | 統營 煙臺島 통영 연대도 | | | ○ | ○ | ○ | ○ | | | ○ | 外海島嶼 |
| 71 | 統營 牛島 ウルマッゲ 통영 우도 울막개 | | | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | 外海島嶼 |
| 72 | 統營 上老大島 통영 상노대도 | | | ○ | ○ | | ○ | | | ○ | 外海島嶼 |
| 73 | 統營 上老大島 山登 통영 상노대도 산등 | | | ○ | ○ | | ○ | | ○ | ○ | 外海島嶼 |
| 74 | 統營 欲知島 통영 욕지도 | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | 外海島嶼 |
| 75 | 麗水 突山 松島 여수 돌산 송도 | | | ○ | ○ | | ○ | | ○? | ○ | 外海島嶼 |
| 76 | 麗水 安島 여수 안도 | | ○ | ○ | ○ | ○ | | | ○ | ○ | 外海島嶼 |
| 77 | 高興 外羅老島 고흥 외나로도 | | | ○ | | | | | | | 外海島嶼 |
| 78 | 麗水 巽竹島 여수 선죽도 | | | | ○ | | | | | ○ | 外海島嶼 |
| 79 | 麗水 巨文島 여수 거문도 | | | ○ | ○ | | ○? | | ○ | ○ | 外海島嶼 |
| 80 | 莞島 麗瑞島 완도 여서도 | | | ○ | | | | | | | 外海島嶼 |
| 81 | 新安 大黑山島 신안 대흑산도 | | | | | ○? | | | | ○ | 外海島嶼 |
| 82 | 新安 下苔島 신안 하태도 | | | | | ○? | | | | | 外海島嶼 |
| 83 | 新安 可居島 신안 가거도 | | | ○ | ○ | | | | ○ | ○ | 外海島嶼 |
| 84 | 濟州 漢東里 제주 한동리 | | | ○ | | | | | ○ | ○ | 外海島嶼 |
| 85 | 濟州 高山里 제주 고산리 | ○ | ○? | ○ | | | | | | | 外海島嶼 |
| 86 | 濟州 三陽洞（三和地区）제주 삼양동（삼화지구） | ○ | ○ | | | | | | | | 外海島嶼 |
| 87 | 濟州 道頭洞 제주 도두동 | | | ○ | ○ | | | | | | 外海島嶼 |
| 88 | 濟州 北村里 제주 북촌리 | | ○ | | | | | | ○ | ○ | 外海島嶼 |
| 89 | 濟州 月令里 제주 월령리 | | | | | | | | ○ | | 外海島嶼 |
| 90 | 濟州 梨湖洞 제주 이호동 | | | | | | | | ○ | | 外海島嶼 |
| 91 | 濟州 城邑里 제주 성읍리 | | ○? | | ○ | | | | ○ | | 外海島嶼 |
| 92 | 濟州 沙溪里 제주 사계리 | | | ○ | | | | | ○ | | 外海島嶼 |
| 93 | 濟州 終達里 제주 종달리 | | | | | | | | ○ | ○ | 外海島嶼 |
| 94 | 濟州 水山里 제주 수산리 | | | | | | | | ○ | | 外海島嶼 |
| 95 | 濟州 溫平里 제주 온평리 | | | | ○ | | | | ○ | | 外海島嶼 |
| 96 | 濟州 龍潭洞 제주 용담동 | | | | ○ | | | | | | 外海島嶼 |
| 97 | 濟州 上道里 제주 상도리 | | | | ○ | | | | | | 外海島嶼 |
| 98 | 濟州 金寧里 제주 김녕리 | ○ | | ○ | | | | | | | 外海島嶼 |
| 99 | 濟州 柑山里 제주 감산리 | | | | ○ | | | | | ○ | 外海島嶼 |
| 100 | 濟州 下慕里 제주 하모리 | | | | ? | | | | ○ | ○ | 外海島嶼 |

結論として、韓日共同の「漁撈文化圏」は存在しなかったというのではなく、その時期が新石器時代後期以降であり、漁民の積極的な海洋進出と漁撈活動により形成されたということを明らかにしたという点で、本稿の意義を位置づけることができた。しかし、本稿の結論は提案水準に過ぎず、韓日共同の漁撈文化圏の具体的な実態と詳細な内容については、今後の韓日研究者とともに究明しなければならない課題である。

## ４．おわりに

筆者は、新石器時代前半期の韓半島南海岸と九州地域の墓について比較してみたことがある。韓半島南海岸地域は、伸展葬と屈葬がともに使用され、敷石・積石施設などに石を使用する葬墓行為、多様な土器副葬という特徴がある反面、九州地域では屈葬を普遍的に採用して人体毀損のような特別な葬制が存在し、土器を副葬しなかった。結果的に、韓半島南海岸と九州地域は、埋葬儀礼の面で独自の伝統を維持し、韓日交流が活発だった時期でも埋葬儀礼は交流の範囲に含まれなかったと判断した（金恩瑩 2022）。

また、新石器時代前期に韓半島中東部～南部地域には、漁撈活動と関連し海を眺める山上遺跡や、海へ突き出た地点に石斧や砥石などが出土する海洋信仰関連遺跡がしばしば確認される（金恩瑩

2023b)。反面、九州地域では海岸近くから石斧が出土する事例はあるが、韓半島の海洋信仰遺跡と関連が想定される遺跡は、いまだ未発見である（古澤 2023)。

このように、韓半島南部地域と九州地域との交流は、おもに生業と関連した文物と情報の交換に留まり、視覚的な情報を得る機会が少ない埋葬儀礼・信仰のような精神的な面と関連する遺物と遺構では、交流の痕跡がほとんどみられない。これは新石器時代の韓日交流の限界と特徴ではないかと考えられる。

今回の検討を通じ、近年日本から提示されている共同漁撈文化圏の不在説は受け入れ難く、新石器時代後期に大韓海峡の間にある漁撈文化圏が形成されたことを提示した。新石器時代のもっとも新しい時期に生じた韓日交流の動態が、青銅器時代の稲作農耕の伝播に続くかどうかも、依然として有効な研究課題と考えられる。

**【註】**

註１　この編年表では、韓半島は林尚澤（2007:49-51頁）の編年案を基礎とし、時期区分は中西部地域を基準として南部と中東部地域に適用させ、他の研究者が使用する早期＝（竹邊里式土器）隆起文土器説と区別するために、「初期」という用語を使用した。九州地域の土器編年との併行関係は、田中聡一（2003)・廣瀬雄一（2022）を参考にした。韓半島の歴年代は統一した較正曲線で補正して実年代を計算したのではなく、発掘調査報告書などから引用した較正年代を土台として推定した。九州地域の歴年代に対しては、泉拓良（2013)、辻誠一郎（2013)、廣瀬雄一（2022）を参考にした。

註２　蔚山の處容里遺跡では黒曜石の石鏃が１点出土しているが、同じ遺物を異なる機関で測定したところ、異なる分析結果が得られ注目される。韓国地質環境研究所では、ED-XRF 分析法を利用して九州地域の針尾島・大崎半島という結果を導き出したが、国立大邱博物館と韓国基礎科学支援研究院が実施した誘導結合プラズマ質量分析器（LA-ICP-MS）とステップドラム形状分析法（SSA）を利用した分析では、白頭山系という結果が得られた。

註３　南部地域では隆起文土器段階に、鋸刃を大きく作った石鋸は出土せず鋸歯状尖頭器のみ出土するが、高城の文岩里遺跡では鋸歯状尖頭器と石鋸のセット関係がみられ、南部地域でも隆起文土器段階にそれが石鋸とセットで組合式銛頭として使用されていたことが推定される。蔚州の新岩里遺跡の報告者も、鋸歯状尖頭器を組合式銛頭としてみている（釜慶文物研究院 2017)。

註４　韓半島南海岸地域でおもに報告される石鋸に対し、我が国の研究者たちは鋸歯状尖頭器の Side Blade として袋部（溝〈訳者補足〉）に差し込んで使用する組合式銛頭、すなわち漁撈具とみている（河仁秀 2006、李相奎 2020)。韓半島東北地域では「鋸刃」と呼ぶ遺物が分布しているが、北朝鮮の研究者たちは加工具と推定する。東南海岸地域の鋸刃と東北地域の石鋸は形態が類似する面もあるが、系統を異にして出現するとも推定され、異なる用語を使用するほうが妥当であろう。

註５　瀛仙洞式土器段階の狩猟具の様相が確実でない点が、この時期に黒曜石の搬入があるかどうかの不明確さと関連があるといえる（金恩瑩・張龍俊 2022)。

註６　襄陽の鰲山里遺跡Ａ地区Ⅴ－③層から出土し、結合式漁撈具とみられる遺物（ソウル大学校博物館1984の図面18－①の左側の２番目）で、「断面が平らで、前後の面に溝をいくつか刻んで針を付ける部分も平らでない特異な形態のもの」と記述されている。筆者は直接実見していないが、図面と報告書の記述を通して判断すれば、結合式釣針の石製軸部を再活用して異なる用途で使用した石器ではないかと推定する。南部地域の様相ではあるが、鰲山里式土器と併行期である隆起文土器段階の軸部のなかに側面結合式はないという点も考慮すれば、より直接的な根拠が出てくるまでは、結合式釣

針からは除外したい。

註７　統営の欲知島貝塚の石積の下層の場合、隆起文土器、刺突押圧文（瀛仙洞式）土器、太線沈線文（水佳里Ⅰ式）土器だけ出土したと報告されているが、欲知島貝塚を全体的にみた時、鳳溪里式土器と退化沈線文土器、二重口縁土器も出土した。したがって、欲知島貝塚から出土した結合角度45°以上の正面結合段針部も後期に帰属する可能性を除外できない。河仁秀も、この型式の針部を後期以後に推定している（河仁秀 2006）。

註８　国立晋州博物館 張龍俊先生のご教示による。

註９　水ノ江は菜畑遺跡出土結合式釣針も後期に帰属する可能性を提示した（水ノ江 2015）。ところで、菜畑遺跡出土結合式釣針は上下結合式針部が主体である九州地域では稀で側面結合式である。また、４点中２点は14中層から出土し、２点は14層（14上・中・下か不明である遺物）と報告されているが、14中層からは縄文時代中期以降の土器がまったく出土しておらず、14層には前期土器が主体で中期と後期の土器は混在するとされる（唐津市 1982）。したがって、少なくとも14中層から出土した２点は、前期以前に帰属する可能性が高い。菜畑出土の結合式釣針は、縄文時代前期後半の曽畑式土器に帰属するなら、東三洞貝塚１号住居跡の側面結合式と関連する可能性がある。また、曽畑式土器に帰属したとしても、韓半島南部地域はサルレ式土器の時期に該当するが、石製軸部の結合式釣針はすでに消滅していて時期的に重ならず、韓半島の石製軸部の結合式釣針が九州地域の結合式釣針の出現に影響を与えていないと考えられる。今後、資料の増加の推移を注目しなければならない部分である。

註10　山崎純男は一尾貝塚から出土したテングニシ製の軸部を正面結合式とする（五和町教育委員会 2000）。

註11　これに対し崔鐘赫は、新石器時代前期と中期以降とは、韓半島南部地域と九州地域は外洋性漁撈の発達時点がそれぞれ異なっていたということを根拠に、交流活動の主体と対象が変化したと指摘した（崔鐘赫 2008）。両地域の生業形態の差に注目したきわめて妥当な見解と考えられ、筆者もまたこの点を念頭において今後研究を深化させる次第である。

**【引用・参考文献】**

**《韓国文献》**

국립대구박물관　2018『한반도 출토 흑요석 산지연구』国立大邱博物館所蔵品調査研究３
（国立大邱博物館2018『韓半島出土黒曜石産地研究』国立大邱博物館所蔵品調査研究３）

김은영　2102「영선동식토기의 편년」『부산대학교 고고학과 창설20주년 기념논문집』pp.63−97
（金恩瑩　2012「瀛仙洞式土器の編年」『釜山大学校考古学科創立20周年記念論文集』）

김은영　2022「한반도 남해안과 일본 큐슈지역 신석기시대 전반기 무덤의 비교 」『박물관연구논문집』제28집 pp.25−69
（金恩瑩　2022「韓半島南海岸と日本九州地域 新石器時代前半期墓制比較」『博物館研究論集』第28集 25−69頁）

김은영 2023a「신석기시대 남해안지역 어로구의 변천과 특징」『남해안 초기어구』국립해양박물관 pp.138−162
（金恩瑩2023a「新石器時代南海岸地域漁撈具の変遷と特徴」『南海岸初期漁具』国立海洋博物館138−162頁）

김은영 2023b「한반도 신석기시대 해양신앙의 형성과 특징」『신석기시대 해양신앙 』부산박물관 학술연구총서 제75집 pp.186−199
（金恩瑩　2023b「韓半島新石器時代海洋信仰の形成と特徴」『新石器時代海洋信仰』釜山博物館学術研究叢書第75集 186−199頁）

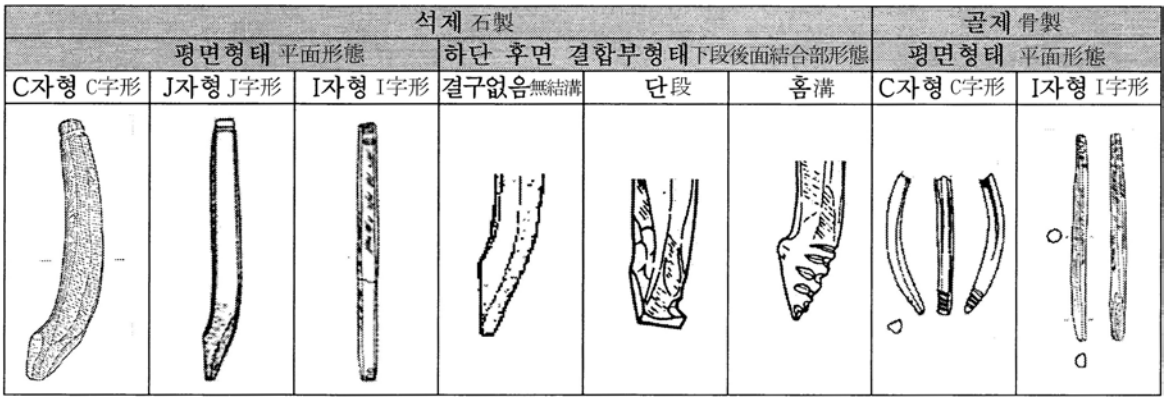
김은영　2024「토기로 본 신석기시대 중동부지역의 위치」『강원 신석기문화의 여정』2024한국신석기학회 − 국립문화유산연구원 공동학술대회 발표요지 pp. 23−44

(金恩瑩　2024「土器からみた新石器時代中東部地域の位置」『江原新石器文化の旅』2024韓国新器学会－国立文化遺産研究院 共同学術大会発表要旨　23－44頁)
김은영・장용준　2022「한반도 신석기시대 흑요석제 석기의 출토양상과 의미」『한국고고학보』22－2호 pp.215－247
(金恩瑩・張龍俊　2022「韓半島新石器時代黒曜石製石器の出土様相と意味」『韓国考古学報』22－2号215－247頁)
부경문물연구원　2017『蔚州 新岩里 遺蹟』古蹟調査報告 第22輯
(釜慶文物研究院　2017『蔚州 新岩里 遺蹟』古蹟調査報告 第22輯)
서울대학교박물관　2018『鰲山里遺蹟』서울大學校考古学人類学叢刊 第９冊
(ソウル大学校博物館　2018『鰲山里遺蹟』서울大學校考古学人類学叢刊 第９冊
손보기　1982『상노대도의 선사시대 살림』
(孫寶基1982『上老大島の先史代のくらし』
이상규　2020『동북아시아 신석기시대 어로문화 변동과정 연구』부산대학교대학원 고고학과 박사학위논문
(李相奎　2022『東北アジア新石器時代漁撈文化変動過程研究』釜山大学校大学院考古学科博士学位論文)
임상택　2007「신석기시대」『한국 고고학 강의』한국고고학회 pp.47－72
(林尚澤　2007「新石器時代」『韓国考古学講義』韓国考古学会 47－72頁)
임상택　2008「신석기시대 대한해협 양안지역 교류에 대한 재검토」『한・일 교류의고고학』영남・구주고고학회 합동고고학회 발표요지』pp.13－39
(林尚澤　2008「新石器時代大韓海峡海岸地域交流に関する再検討」『韓・日交流の考古学』嶺南・九州考古学会　合同考古学界発表要旨』13－39頁)
최종혁　2008「新石器時代 南部地方 文物交流 様相」『石堂論叢』40집 동아대학교 석당학술원 pp.95－133
(崔鐘赫　2008「新石器時代南部地方文物交流様相」『石堂論叢』40集東亜大学校石堂学術院 95－133頁)
하인수　2006「동남해안지역 신석기시대 어로구」『신석기시대의 어로문화』동삼동패총 전시관 학술총서 pp.153－189
(河仁秀　2006「東南海岸地域新石器時代漁撈具」『新石器時代の漁撈文化』東三洞貝塚展示館学術叢書153－189頁)
히로세유우이치　2022『대한해협을 둘러싼 신석기시대 교류연구』부산대학교 대학원 고고학과 박사학위논문
(廣瀬雄一　2022『大韓海峡をめぐる新石器時代交流研究』釜山大学校大学院考古学科博士学位論文)

**《日本文献》**

泉　拓良　2013「縄文文化の展開と地域性」『講座日本の考古学３ 縄文時代（上)』青木書店　3-20頁
五和町教育委員会（山崎純男編集・執筆）　2000『一尾貝塚』五和町史資料編（その11）
及川民次郎　1933「南朝鮮牧ノ島東三洞貝塚」『考古学』４・５　東京考古学会　139-148頁
唐津市　1982『菜畑』
木村幾多郎　2003「縄文時代の日韓交流」『東アジアと日本の考古学Ⅲ 交流と交易』同成社　29-56頁
久我谷渓太　2016「鋸歯尖頭器・石鋸の系譜と展開」『東京大学考古学研究室研究紀要』30　1-32頁
甲元眞之　1999「環東中国海の先史漁撈文化」『文学部論叢』65 熊本大学文学部　133-165頁
田中聡一　2003「日韓新石器時代土器編年の併行関係－対馬海峡・大韓海峡周辺地域を中心に－」『先史学・考古学論究』Ⅳ　龍田考古学　17-34頁
田中聡一　2013「九州と韓半島」『季刊考古学』125　雄山閣　28-31頁
田中聡一　2018「日韓縄文・新石器時代土器交流の一様相－曽畑式土器の成立と櫛目文土器との関係－」『海峡を通じた文化交流』九州考古学会・嶺南考古学会第13回合同考古学大会　1-20頁
田中聡一・古澤義久　2013「韓半島と九州」『季刊考古学』125　雄山閣　79-84頁
辻誠一郎　2013「縄文時代の年代と陸域の生態系史」『講座日本の考古学３　縄文時代（上)』青木書店　61-81頁
中尾篤志　2009「西北九州地域における漁撈具の動向」『九州における縄文時代の漁撈具』九州縄文研究会６-16頁
中尾篤志　2013「結合式釣針」『季刊考古学』125　雄山閣　55-58頁
廣瀬雄一　2023『対馬海峡をめぐる先史考古学』同成社
福永将大　2024「佐賀県唐津市徳蔵谷遺蹟出土の韓半島系土器－縄文時代後期初頭における北部九州と韓半島南部

の交流－」『墳墓と祭祀の考古学』第15回九州考古学会・嶺南考古学会合同考古学大会　258-262頁
古澤義久　2018『東北アジア先史文化の変遷と交流』六一書房
古澤義久　2013「九州と韓半島」『季刊考古学』125　雄山閣　66-70頁
古澤義久　2023「海岸付近で出土する縄文時代石斧について」『신석기시대 해양신앙』부산박물관 학술연구총서제75집　200-231頁
（古澤義久　2023「海岸付近で出土する縄文時代石斧について」『新石器時代海洋信仰　釜山博物館学術研究叢書』第75集）
水ノ江和同　1988「曽畑式土器の出現－東アジアにおける先史時代の交流」『古代学研究』117　古代学研究会　13-38頁
水ノ江和同　2007「ふたたび対馬海峡西水道を越えた縄文時代の交流の意義」『考古学に学ぶ３』同志社大学考古学シリーズ９　73-84頁
水ノ江和同　2015「結合式釣針の系譜」『森浩一先生に学ぶ－森浩一先生追悼論集－』同志社大学考古学シリーズ11　83-93頁




**参考図　李相奎2020による結合式釣針軸部の分類図**

# 金恩瑩「新石器時代韓日交流の動態」を読んで

中尾　篤志

金恩瑩氏の論考は、九州産黒曜石と漁撈具（組合式銛頭（鋸歯尖頭器＋石鋸）、結合式釣針）の韓半島での出土例の分析から、新石器時代の日韓交流について考察したものである。韓半島の時期の明確な出土例や、「遺跡の引き算」で帰属時期を特定した遺物に基づく検討に特徴があるが、九州の出土例にも目配りがされており、日韓両地域の交流の実態について明快に論じられている。評者は九州での漁撈具の集成や（九州縄文研究会 2009）、日韓の結合式釣針について触れたことがあり（中尾 2013）、金恩瑩氏の論考について九州側の視点で、特に結合式釣針についてコメントしたい。

**注目点**　韓半島中東部から南部地域の漁撈具について、地域差を念頭に編年観を提示した点が注目される。西北九州地域では、福田一志氏の論考を嚆矢として（福田 1999）、2000年以降評者、久我谷渓太（久我谷 2016）らにより漁撈具の変遷が整理されたが、今回の金恩瑩氏の論考により、日韓両地域での比較検討の土台が整ったことになる。

金恩瑩氏によれば、新石器時代早期隆起文土器段階は、韓半島中東部～南部地域にかけて、大きな鋸刃の組合式銛頭（鋸歯状尖頭器）と、正面結合式の石製軸部と骨製針部からなる結合式釣針（鰲山里型結合式釣針）で構成され、大きな鋸刃の組合式銛頭は長崎県対馬市越高遺跡で出土しているものの、結合式釣針の九州への影響はない。これに対し、新石器時代後期栗里式土器段階は、韓半島南部地域で小さな鋸刃の組合式銛頭（鋸歯状尖頭器）と正面結合式、側面交差式結合式釣針からなる。また、韓半島南部地域内での地域差にも触れ、統営以西では正面結合式の結合式釣針、統営～釜山地域では側面交差式の結合式釣針が分布することを指摘したうえで、統営～釜山地域の側面交差式の結合式釣針は西北九州地域からの影響で出現したと想定した。

評者は日韓両地域の結合式釣針を比較する中で、両地域の接点となりうるのは側面交差式である点を指摘したが（中尾 2013）、金恩瑩氏も同様の見解である。問題は、①接点を持った時期はいつか、②起源地は日韓のどちらか、である。①については、西北九州地域では佐賀県唐津市菜畑遺跡14層から４点の結合式釣針針部が出土している（唐津市 1982）。結合部の側面にわずかに面取り様の加工があり、４点とも側面交差式と考えられる。菜畑遺跡14層は、縄文時代前期の曽畑式土器が主体で中期と後期の土器が混在するが、14中層からは縄文時代中期以降の土器は出土していない。水ノ江和同氏は菜畑遺跡出土結合式釣針の帰属時期を縄文時代後期とする見解を示しているが（水ノ江 2015）、菜畑遺跡14層の結合式釣針は縄文時代後期の側面交差式結合式釣針よりも小型で華奢であり、湾曲は少ない、外鐖が小さいなど、形態的に異なる特徴を有することから、評者は縄文時代中期以前に位置づけることは可能と考えている。金恩瑩氏は、東三洞貝塚浄化地域１号住居跡から出土した外鐖式・溝・側面交差式結合式釣針針部を水佳里Ⅰ式段階としているが、結合部の面取り加工の共通性や外鐖が小さい特徴から、菜畑遺跡14層出土結合式釣針針部と対比しうると考える。

②については、時期的には韓半島新石器時代中期水佳里Ⅰ式段階、九州縄文時代前期の曽畑式土器段階が接点となりそうだが、韓半島では水佳里Ⅰ式段階の結合式釣針は東三洞貝塚以外知られておらず、前段階のサルレ式土器段階は空白となることから、金恩瑩氏は新石器時代前期からの系統関係はないとする。一方、日本列島では縄文時代早期末に青森県で正面結合式の赤御堂型結合式釣針が知られていたが（江坂 1958・渡辺 1973）、近年、富山県富山市小竹貝塚で縄文時代前期後葉～末の正面結合式の結合式釣針針部がまとまって出土した（町田編 2014）。菜畑遺跡出土結合式釣針とは形態差

が大きく、地理的な距離も大きいため、現時点で直接系譜を結びつけることには慎重であるべきだが、縄文時代前期に日本海沿岸地域で日韓両地域に共通する結合式釣針が展開していた事実は非常に重要である。今後、水ノ江和同氏が指摘するように、日本海沿岸地域との交流により九州で出現した可能性も検討すべきかもしれない（水ノ江 2015）。

縄文時代後期以降は、西北九州地域では上下結合式、側面交差式の結合式釣針と単式釣針で構成される。金恩瑩氏の論考では、縄文時代後期の西北九州地域の結合式釣針は上下結合式が主体との言及がみられるが、2009年の集成では上下結合式22点（軸部９点、針部13点）に対し、側面交差式は24点（軸部10点、針部14点）出土しており、分布も前者が長崎県西海岸から天草諸島・五島列島・対馬で見られるのに対して、後者はこれに加えて糸島半島周辺まで広がりを持つ。そのため、この時期の結合式釣針の日韓両地域間での影響関係を検討する場合、いずれの地域でも出土数が多い側面交差式を対象とするのが適切であろう。評者は、縄文時代後期の西北九州地域の側面交差式の結合部の特徴は、軸部・針部ともに長軸方向と直交するように抉りを入れるものが多い点にあると考えるが、新石器時代後期栗里式土器段階の側面交差式は軸部・針部とも平坦面を作って接合する場合が多いように見受けられた。共通した結合方法でも、結合部の加工方法に着目した比較検討が今後望まれよう。

**意義**　韓半島中東部から南部地域の新石器時代前期から後期にかけての漁撈具について、時期差、地域差を明らかにした研究であり、日韓の比較研究の基礎をなす重要な論考と考える。これにより、今後検討すべき対象や着眼点が明確にとなったと受け止めた。また、漁撈具の影響関係について、新石器時代後期栗里式土器段階（縄文時代後期初頭併行期）に限定したうえで、西北九州地域から韓半島南部地域への影響を指摘した点は斬新である。一方、土器にみる日韓の影響関係と、九州産黒曜石の搬入状況や漁撈具の影響関係について、一致する時期もあれば、一致しない時期もあるとの指摘は興味深い。石器や骨角器の比較研究においては、ともすれば先行する土器研究で影響関係がある時期にあてはめがちな傾向に警鐘を鳴らすものである。その意味でも「遺跡の引き算」で帰属時期を特定する手法は本稿の根幹をなす重要な手法であり、西北九州地域の漁撈具についても同様の視点での再検討の必要性を痛感した次第である。

**【中尾篤志コメント関係文献（金恩瑩論文との重複文献以外）】**


中尾篤志　2009a「西北九州地域における漁撈具の動向」『九州における縄文時代の漁撈具』九州縄文研究会　6-16頁

中尾篤志　2009b「九州地方の縄文時代漁撈具」『韓・日新石器時代の漁撈と海洋文化』第８回韓・日新石器時代共同学術大会発表資料集　韓国新石器学会・九州縄文研究会　111-144頁

九州縄文研究会　2009『九州における縄文時代の漁撈具』第19回球種縄文研究会長崎大会発表要旨・資料集　九州縄文研究会

福田一志　1999「西北九州における縄文後期遺跡の特性－土器分布・石器を中心として－」『西海考古』創刊号　西海考古同人会　35-50頁

（公益財団法人）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所　2014『小竹貝塚発掘調査報告－北陸新幹線建設に伴う埋蔵文化財発掘報告Ⅹ－』

江坂輝彌　1958「日本石器時代における骨角製釣針の研究」『史学』31-１～４　542-586頁

渡辺　誠　1973『縄文時代の漁業』考古学選書７　雄山閣

# 金恩瑩「新石器時代韓日交流の動態」を翻訳して（訳者後記）

水ノ江和同

**執筆者紹介**　「新石器時代韓日交流の動態」は、2024年12月に韓国の国立海洋博物館の論文集である『海洋遺産』６号に掲載された論文である（原題は「신석기시대 한일교류의 동태」『해양유산』６ 국립해양박물관 pp.62-86)。この論文の執筆者である金恩瑩（김 은영・キム ウニョン）は現在、釜山博物館（釜山広域市立）の調査研究チーム長である。金恩瑩はこれまで韓半島南部地域の新石器時代について、土器編年を中心に各種遺物や遺跡に関する研究論文を多数発表している。特に、韓半島と日本列島（以下「韓日」とする）の関係性については近年、韓国側の視点から積極的に発言をされており、韓国新石器時代研究者の中堅として注目されている。

1990年３月に高麗大学校に入学。1996年12月に釜山博物館に就職。1998年３月には釜山大学校大学院に進学して、2003年３月に修士論文「新石器時代貝釧研究」を提出。2005年４月には東京大学大学院修士課程に進学して、2007年３月には修士論文「韓半島東・南部地域 新石器時代早・前期土器研究」を提出。2007年４月には東京大学大学院博士課程に進学するも、2009年３月に中途退学して同年４月に釜山博物館へ復職。2018年９月には提出した「沿東海地域新石器時代文化研究」により東京大学から博士学位が授与された。

**本論文概要**　今回の論文の主目的は、新石器時代（ここではおもに日本列島の縄文時代早期末葉から後期後葉）における韓半島と日本列島（ここではおもに九州）について、韓国側からの再検討である。この問題については、1960年代から土器では隆起文土器と轟Ｂ式土器、櫛目文土器と曽畑式土器が、そして漁撈具としては結合式釣針や組合式銛頭・石鋸が、その関係性を示す象徴的な考古資料として多くの注目を集めてきた。またその要因として漁猟民による交流が大きな役割を果たしたとして、大韓海峡（対馬海峡西水道）をめぐる「漁撈文化圏」の存在も提示されるようになった。

しかし、2003年以降日本側では（水ノ江 2023)、両者の年代的な併行関係や細部の特徴に関する詳細な再検討が進められ、また、それらの自生の可能性も指摘されるようになった。その結果、日本側からの見解として、縄文時代における九州と韓半島の関係性は「交流」といえるほど両者の文化に影響を与えるものではなく、人々の「往き来」程度の関係性であり、漁撈文化圏の存在も想定しがたいという見解が主流になってきた。これに対し金恩瑩は、韓半島の結合式釣針と組合式銛頭・石鋸の年代と形態や構造を詳細に分析し、改めて韓日交流および漁撈文化圏の存在を主張した。

**注目点**　訳者がこの論文で注目した最大のポイントは、韓半島出土の結合式釣針などの年代の決定方法である。すなわち、金恩瑩が日本でいうところのいわゆる「遺跡の引き算」（廣重 2025）という手法を用い、年代の特定を進めた点にある。韓国では概して、ある考古資料が複数型式の土器とともに出土した場合、その考古資料の年代を複数型式分の土器幅に合わせるか、あるいはもっとも出土量の多い土器型式に属するとみなす傾向にある。そこには日本列島の縄文土器とは異なり、文様は基本的に横位に連続的に施文されるため構成が単純になりがちで、詳細な分類と編年が難しいという背景もある。そのため遺跡の引き算という手法もこれまでほとんど採用されなかった。今回、金恩瑩はこの遺跡の引き算という手法により結合式釣針などの年代決定を詳細に実施しているが、そこには本人によるこれまでの詳細な土器編年研究の蓄積があるからこそ、この手法が活かされたといえる。

さて、この遺跡の引き算という手法で年代を特定し、韓半島南海岸と九州の結合式釣針と組合式銛頭・石鋸との年代的併行関係および形態・構造的類似性から、やはり一定程度の交流があり大韓海峡

をめぐる漁撈文化圏は存在した、というのが金恩瑩の今回の主張である。これには、2024年３月に対馬の越高遺跡の総括報告書が刊行され、韓半島南海岸の人々が黒曜石を求めて大韓海峡を越えて対馬島まで渡ったことが具体的に想定されるようになった事実関係の存在も大きいと考えられる。

**日本側の研究状況**　この結合式釣針については、日本側の研究では第一人者である中尾篤志に今回コメントをいただいた。中尾もいわれるように、金恩瑩の検討が「遺跡の引き算」による年代決定と、結合式釣針の地域性分析に基づくことを高く評価する。そのうえで、韓半島の新石器時代早期と九州の縄文時代前期の結合式釣針については、その関係性について同意する。しかし、韓半島の新石器時代後期と九州の縄文時代後期の結合式釣針については、細部の特徴や分布域の相違点から今後の課題を指摘した。いずれにせよ、従来の新石器時代・縄文時代の韓日交流研究にはない、「日韓の比較研究の基礎をなす重要な論考」として位置づけている。

また、組合式銛頭・石鋸については、2016年に久我谷渓太によって詳細な年代的位置づけと形態や製作技法の分析がおこなわれている。それによると、韓半島と九州の組合式銛頭の先端にあたる鋸歯（状）尖頭器については、年代的相違や形態的特徴から韓半島の「鋸歯尖頭器として考えられているものは、九州の鋸歯尖頭器のどの類型にも合致しない」「九州で認められる鋸歯尖頭器とは別種のもの」「九州で成立し、九州の沿岸部・島嶼部を中心に展開したもの」という見解を示している。そして結論として、「「漁撈文化（圏）」という枠組みのもとで総体的な文化現象を認めようとする見方は肯定し難い」としている。

**日韓交流と漁撈文化圏の考え方**　こうしてみてくると、韓日交流や漁撈文化圏の存在の有無については、韓国側と日本側ではそもそもその内容と考え方に相違があるように考えられる。韓国側では特定の考古資料に関係性が見いだせれば、そこに交流の存在を想定する。かたや日本側では、日本列島内での縄文文化の交流（関係性）の度合いやイメージと比較するため、対馬海峡西水道をめぐる現状では関係性は薄い、あるいはないに等しいという見解になる。すなわち、韓国側と日本側とで「交流」や「文化圏」の定義に関する共通認識がなければ、この議論は平行線を続ける可能性も無きにしも非ず、である。両国における考古学研究は長い歴史と積み重ねがあり、その相違点がそれぞれの国の研究の個性にもなっている。それだけに簡単な問題ではないが、このことを意識しながら今後も積極的に意見交換を続けていくことの必要性がきわめて大きな課題であると、今回再認識した次第である。

**若干の事実確認**　ところで、金恩瑩も指摘するように、やはり菜畑遺跡の層位問題は非常に重要である。かつては山崎純男（山崎 1987）や大坪志子（大坪 2019）や訳者（水ノ江ほか 2024）もその不安定さを指摘している。今回、結合式釣針２点が出土した「14層中」の年代が問題になっている。「14層中」からは確かに中期以降の土器は出土していないが、その下位層である「14層下」からは中期中葉の船元Ⅱ式土器や中期後葉の春日式土器、さらには後期初頭の坂の下式土器も出土している。なお、この「14層上」からは、弥生時代早期の小型の丹塗磨研土器の底部（No.513）が、「14層」からも同様の底部（No.521）もそれぞれ出土したことになっている。低湿地遺跡の層位の不安定さは、訳者なども近年指摘したところであり注意を払い慎重に臨みたい（水ノ江ほか 2024）。

また、韓国の研究者の間では、後期初頭の坂の下式土器と南福寺式土器との間で混乱がみられる。坂の下式土器は、1979年に田中良之が設定した後期初頭の土器型式である。中期末葉の阿高式土器系統の土器（口縁部文様は凹点文を多用）と、磨消縄文を有する中津式系統の土器がセットをなす土器型式であり、おもに北九州・西北九州（およそ福岡県西部・佐賀県・長崎県）に分布する。南福寺式土器は当初1943年に寺師見國が設定し、その後やはり1979年に田中良之が再設定した後期初頭の土器型式である。坂の下式土器と同様に中期末葉の阿高式土器系統の土器（口縁部に逆Ｓ字文を多用）で

あるが、中津式土器についてはセットでなくごく少量が搬入品として伴う存在である。おもに中九州・東南九州・南九州（およそ熊本県・宮崎県・鹿児島県）に分布する。韓半島南海岸地域で出土するこの類の土器は、土器型式としては坂の下式土器になる。

なお、久我谷は鋸歯尖頭器・石鋸の存続年代を、縄文時代中期末葉の阿高式土器段階から後期後葉の西平式段階とする。中期末葉の根拠としては長崎県のつぐめのはな遺跡をあげるが、つぐめのはな遺跡の出土土器は後期初頭の坂の下式土器である。したがって、出現時期も後期初頭になろう。

**総括**　金恩瑩による「新石器時代韓日交流の動態」はその研究手法と、ここ20年にわたって日本側が主張してきた新石器時代（縄文時代）における漁撈文化圏に基づく韓日交流懐疑説に疑義を提示した点において、きわめて重要な論考といえる。したがって、より多くの日本側の研究者にその意義を理解していただくとともに、活発な議論の展開を期待して、できるだけ早くの日本語訳公開・周知に踏み切った次第である。

最後になりましたが、今回の日本語訳では全文において、韓国の研究者名・参考文献名・遺跡名も日本の研究者がより把握しやすいように、金恩瑩氏にご協力いただき可能な限り漢字表記にしました（漢字表記がない場合はカタカナ表記）。また、韓国と日本の間では地理名称や地域名称の表記や表現について相違がありますが、この点についても金恩瑩氏と協議を重ね、共通認識として今回の表記と表現になりました。併せて直訳した場合、日本語としては意味や意図が伝わりにくい部分についても、意見交換を踏まえ多少の意訳もおこないました。さらに、第Ⅲ章については、訳者の提案により４節分の見出しを付けて分けさせていただきました。表５については今回、遺跡情報追加の要請があり、遺跡番号が原文と異なる場合があります。このように多くの点において、執筆者の金恩瑩氏にはご理解・ご協力いただきましたこと、心から感謝申し上げます。ありがとうございました。なお、急遽有益なコメントをいただいた中尾篤志氏にもお礼申し上げます。

この日本語訳については、訳者の釜山大学校への在外研究の期間中（2025年４月１日から同年９月30日まで）に翻訳をはじめ刊行まで至りました。このことは、訳者を釜山大学校の交流教授として受け入れていただいた釜山大学校人文大学考古学科の林尚澤（임상택・イムサンテク）教授、ならびに日本語訳の掲載をご許可いただいた西海考古学会の片山巳貴子会長と事務局の古門雅高氏のご厚意の賜物であります。心から深く深くお礼申し上げます。

**〖水ノ江訳者後記関係文献〗**

大坪志子　2019「九州における弥生勾玉の系譜」『考古学研究』66-１　考古学研究会　24-41頁
田中良之　1979「中期・阿高式土器の研究」『古文化談叢』６　九州古文化研究会　１-52頁
寺師見國　1943『鹿児島縣下の縄文式土器分類及び出土遺蹟表』鹿児島縣肇国聖蹟調査会
廣重知樹　2025「遺跡の引き算の概念と実例」『考古学と文化史２』同志社大学考古学シリーズ14　57-67頁
水ノ江和同　2003「朝鮮海峡を越えた縄文時代の交流の意義－言葉と文化圏－」『考古学に学ぶ２』同志社大学考古学シリーズ８　55-66頁
水ノ江和同・工藤雄一郎・百原新・門叶冬樹　2024「日本列島におけるモモの伝来をめぐる諸問題－伝来時期・古植物学・遺存状態の検討－」『日本考古学』59　日本考古学協会　１-20頁
山崎純男　1987「北部九州における初期水田－開田地の選択と水田構造の検討－」『九州文化史検討紀要』32　九州大学九州文化史研究施設　127-186頁